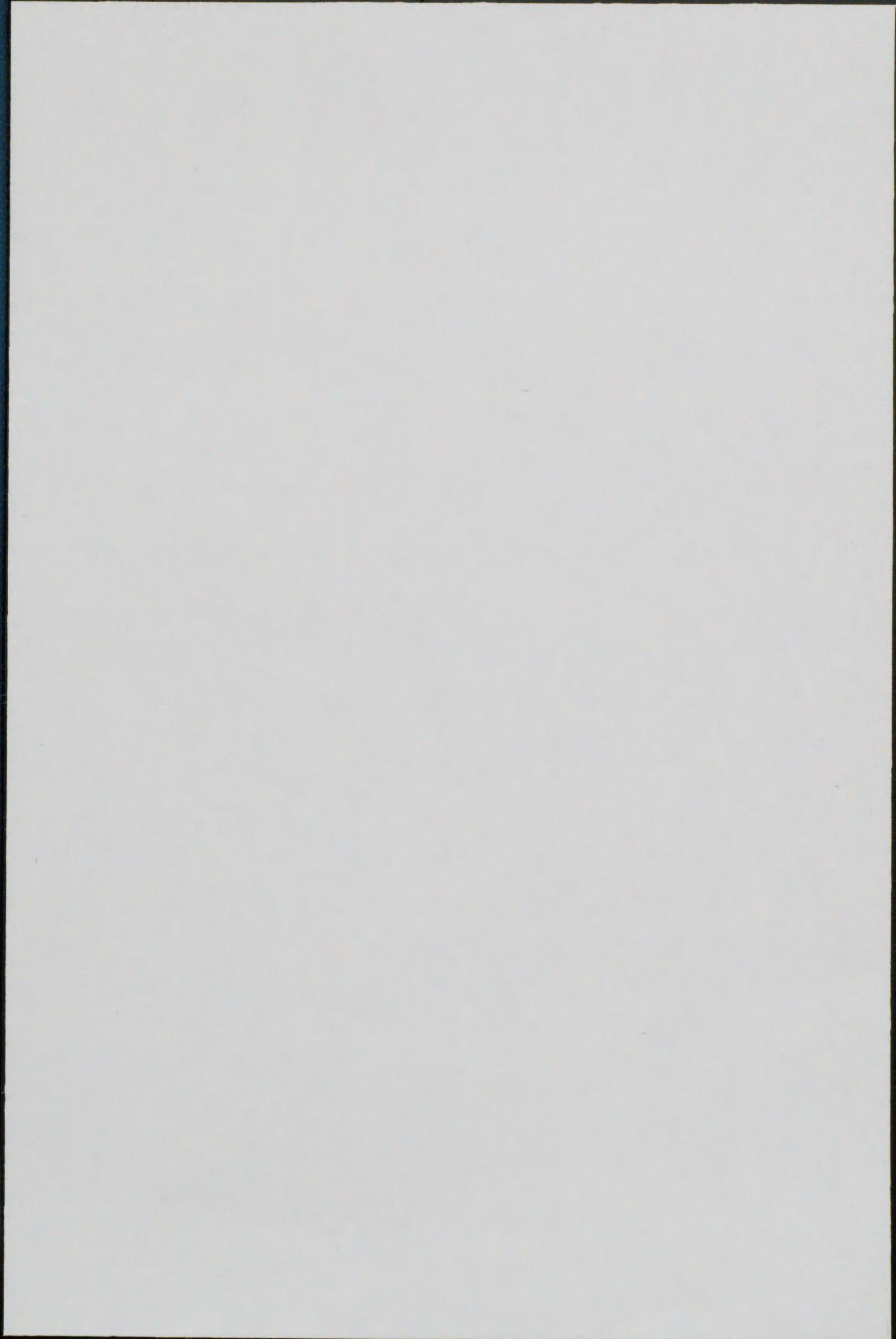


603-82

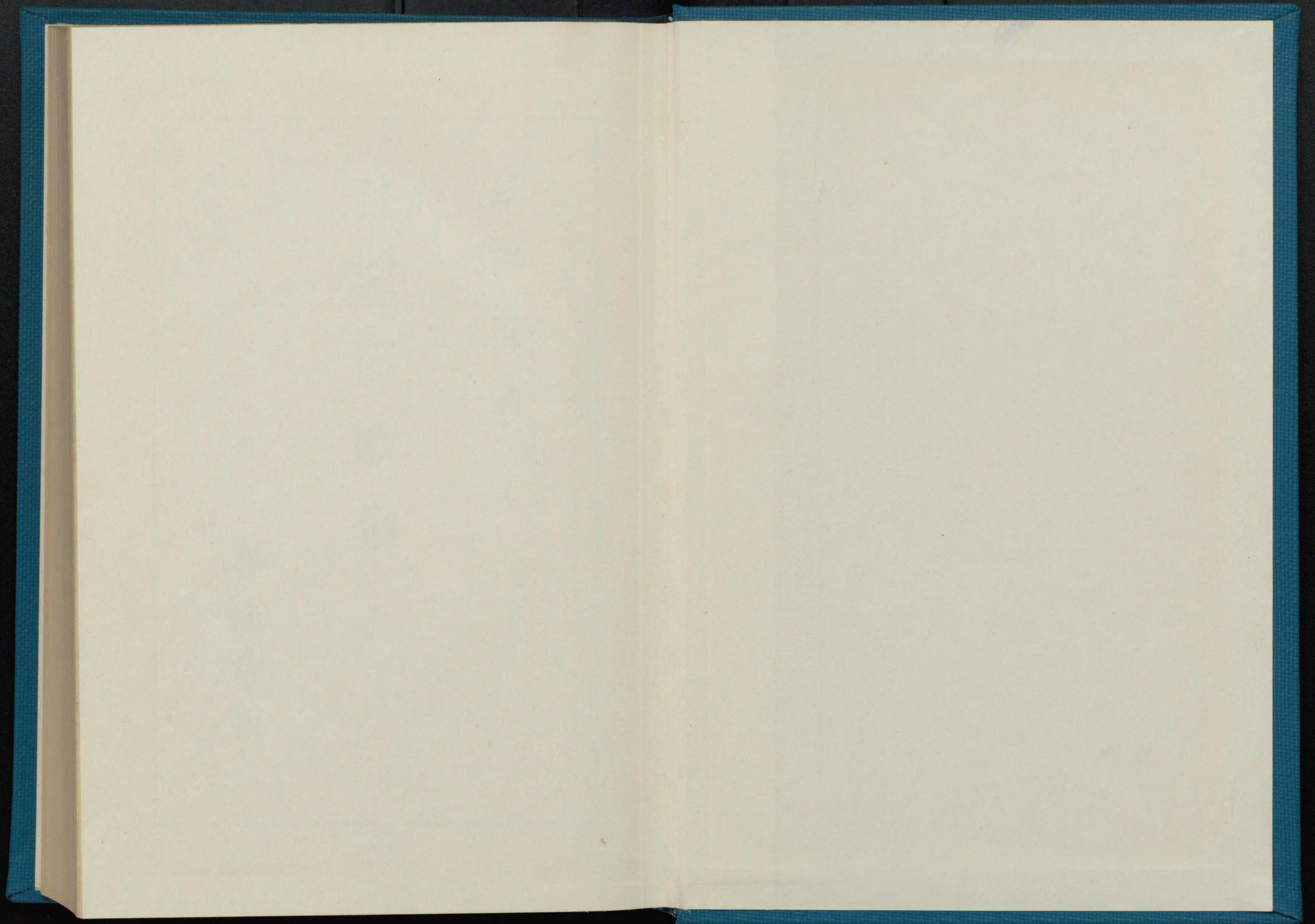


1200501530863

603  
82

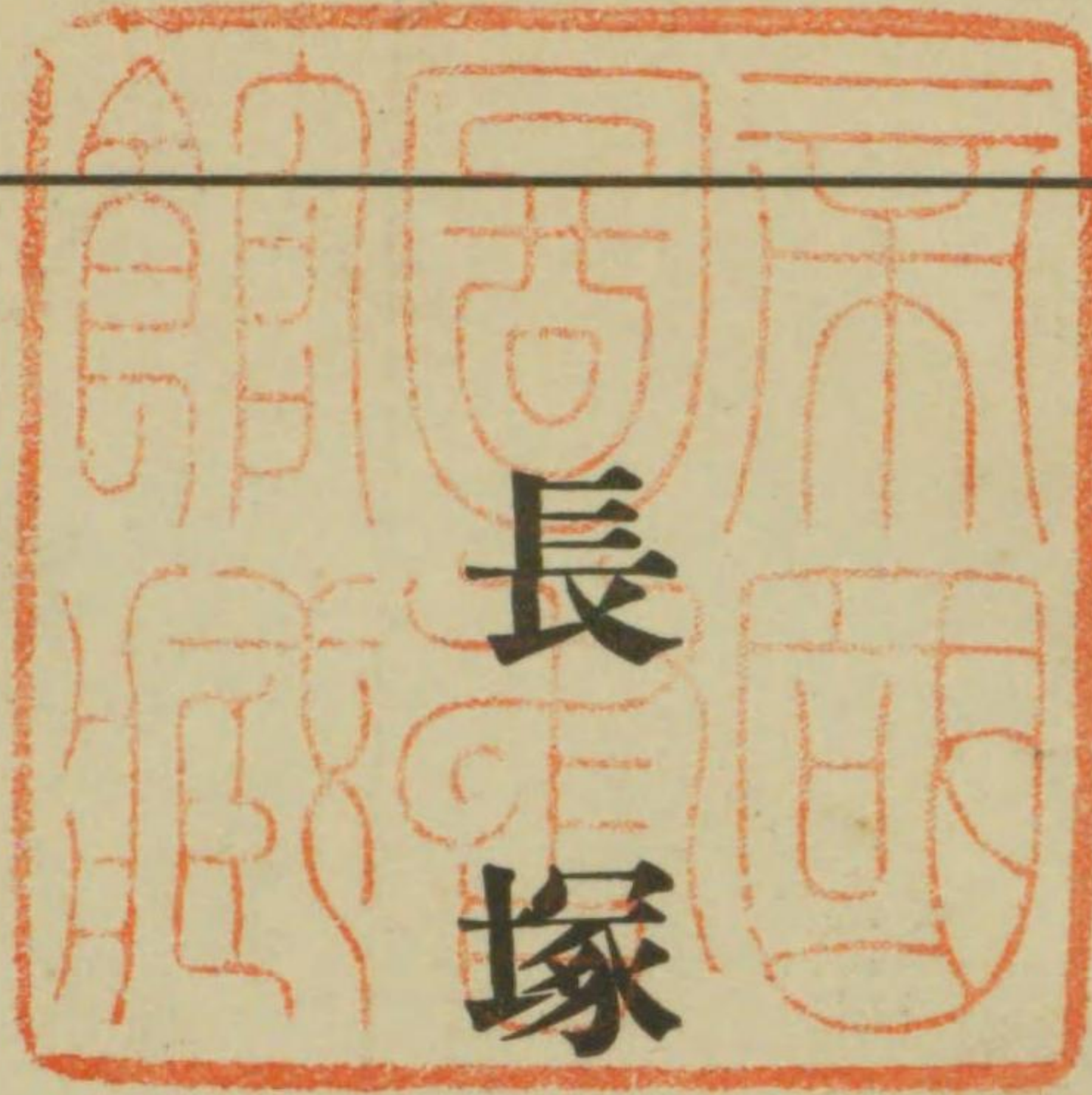








27B68



長塚節著

節歌集

東京 春陽堂版





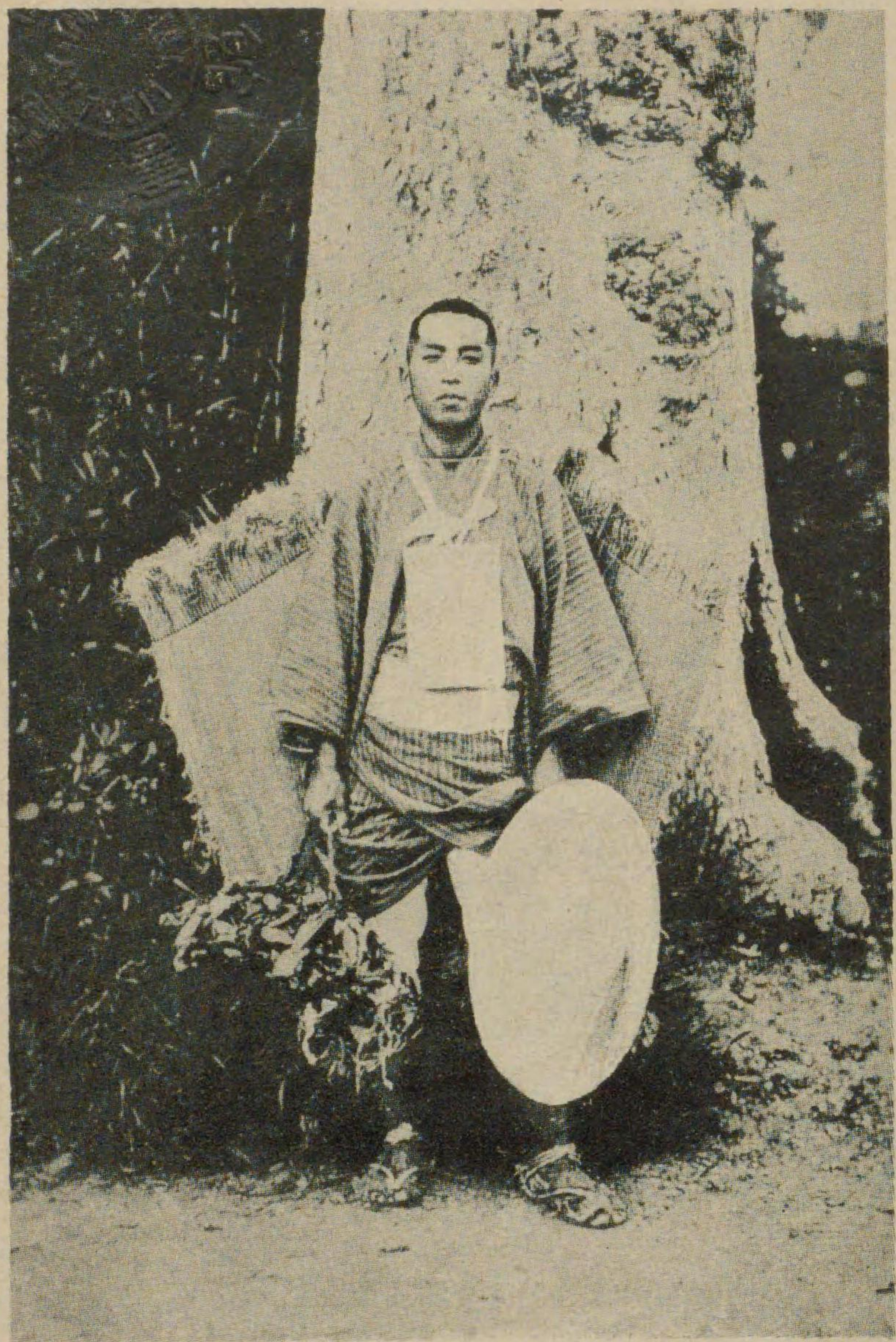


其  
名  
前  
者

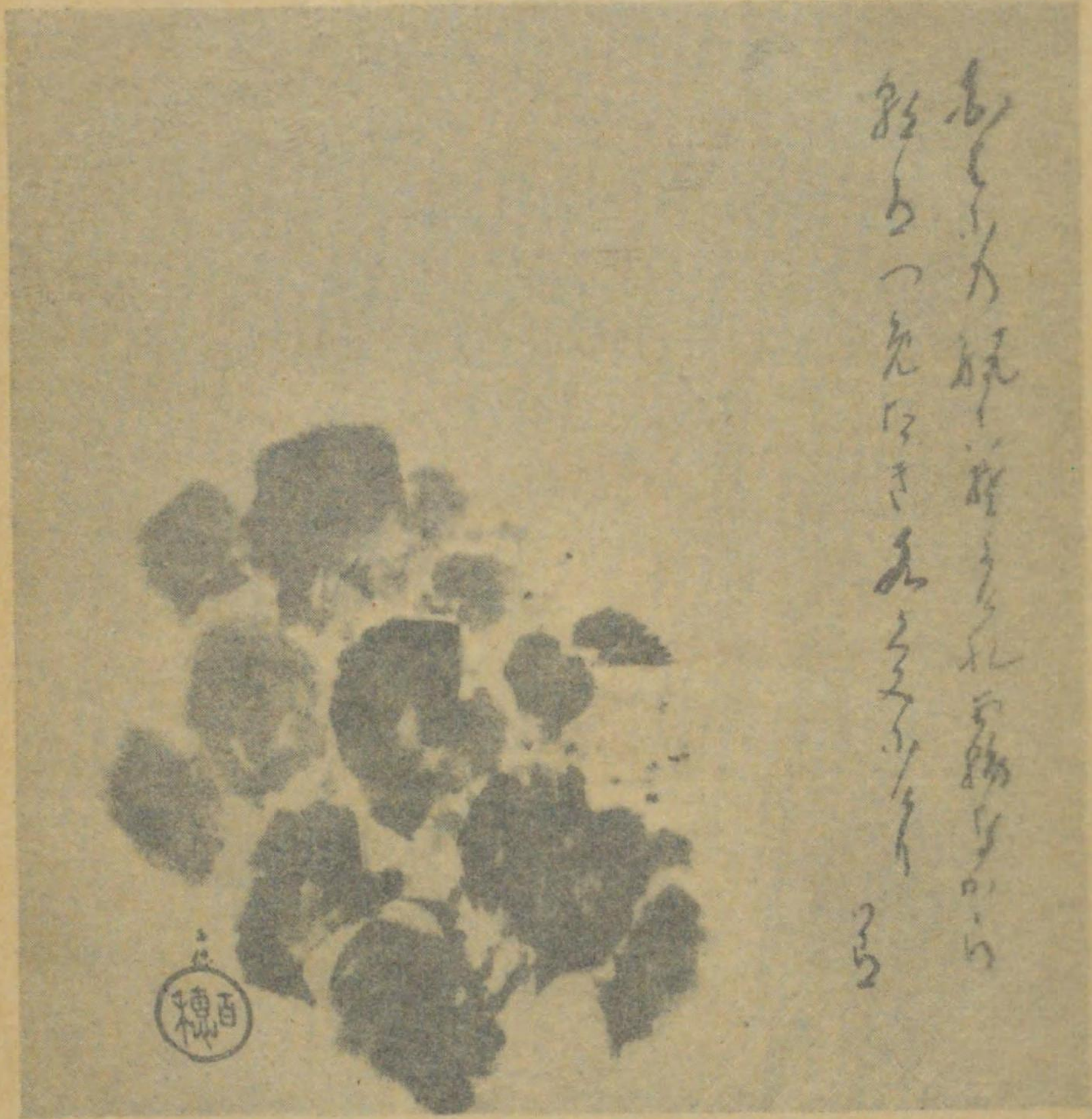
其  
名  
前  
者

其  
名  
前  
者









あつたはねのうら  
なまのうらなまのうら  
うらなまのうら  
うらなまのうら  
うらなまのうら

百穂





あつたての  
新しき  
もの  
なり

百穂



603-82

### 長塚節略年譜

明治十二年 一歳

四月三日、茨城縣下總國結城郡岡田村國生に生る。長塚源次郎の長子。父源次郎二十二歳、母たか子二十歳。

明治十三年 二歳

七月、弟順次郎生る。

明治十四年 三歳

「百人一首」を諳誦し、「いろは歌」を確實に讀む。當時より一生を通じて記憶力甚だ強し。

明治十五年 四歳

四月、妹とし子生る。



明治十六年 五 歳

四月、學齡に達せざれども國生小學校に入學す。七月、弟整四郎生る。

明治十八年 七 歳

一月、妹はな子生る。

明治二十二年 十一歳

三月、國生小學校尋常科卒業、四月下妻尋常高等小學校に入學。

明治二十六年 十五歳

三月、下妻高等小學校卒業。四月、縣立水戸中學校に入學。

明治二十八年 十七歳

夏、下野國鹽原溫泉に赴き療養す。

明治二十九年 十八歳

腦神經衰弱のため水戸中學校を退く。この頃より和歌を作る。夏、鹽原溫泉に

療養す。秋、再び鹽原に遊ぶ。

明治三十年 十九歳

春、病氣療養のため上京、山田鐵藏氏の山田病院に入院す。夏、上野國草津溫泉に療養、滯留十一週日。

明治三十一年 二十歳

是年二月より五月に亙りて、竹の里人正岡子規「歌よみに與ふる書」「人々に答ふ」「百中十首」等を新聞「日本」に連載す。節、後に當時の事を自ら記して曰く「歌よみに與ふる書といふのは十回にわたつたのであつたが、自分にはいかにも愉快でたまらないので、丁寧に切り抜いておいて頻りに人にも見せびらかした……百中十首が出ると初めは變なものだと思つたが段々面白く感じて來てたうとう真似て見るやうになつた……」

明治三十二年 二十一歳



徴兵検査を受く、不合格

明治三十三年 二十二歳

三月、二十八日初めて東京根岸に正岡子規を訪ふ。三十日再び子規を訪ふ。席上「竹の里人をおとなひて」十首を作り、「日本」に掲載せらる。以後年數回上京して時に月餘滞在、其間殆ど隔日に子規を訪ふ。四月一日、根岸庵の歌會に列し、左千夫、麓、秀眞、格堂其他在京の諸同人と相識る。七月、伊藤左千夫と日光に遊ぶ、「日本」の募集課題瀧の歌を作らんがためなり。

明治三十四年 二十三歳

萬葉集及記紀の歌を研究し、多く長歌を作る。作歌は「日本」に發表す。

明治三十五年 二十四歳

四月より「心の花」に「うみ芋集」を連載す。五月、「四月の末には京に上らむと云云」九首を「日本」に掲載。九月、十九日正岡子規逝く。當時伊藤左千夫は子規

と節との氣魂流通の狀を「理想的愛子」と云へり。

明治三十六年 二十五歳

一月、「狂體十首」を「日本」に發表す。三月、妹とし子嫁ぐ。六月より根岸短歌會にて雜誌「馬酔木」を發行す。伊藤左千夫、香取秀眞、結城素明、岡麓、平子鐸嶺、蕨眞、安江秋水、森田義郎等と共に編輯員たり。「馬酔木」創刊號に「萬葉卷の十四」を發表す。七月より八月に互り、京都、奈良、伊勢、紀伊より三河、伊豆に遊ぶ。八月より「馬酔木」に「東歌餘談」を連載す。十一月、「西遊歌」を「馬酔木」に發表す。十二月、「馬酔木」に寫生文「月見の夕」及び「竹の里人」を發表す。この頃多く「桜芽」の號を用ゐる。

明治三十七年 二十六歳

二月、「萬葉口舌」及寫生文「土浦の河口」を、四月、寫生文「利根川の一夜」、短歌「榛の木の花」を、五月、「萬葉口舌」を、七月、「歌の季に就て」を、八月、「夏季



雜詠」「竹の里人選歌に就て」を、何れも「馬酔木」に發表す。五月、弟整四郎陸軍士官學校を卒業す。「竹の里人選歌」根岸短歌會より出版せらる。

明治三十八年 二十七歳

一月、「馬酔木」に「寫生の歌に就て」「秋冬雜詠」を發表す。二月、「馬酔木」に「萬葉口舌」及「俳句三十二章」を發表す。四月、「馬酔木」に「枯桑漫筆」を發表す。弟整四郎歩兵少尉として出征す。五月、「馬酔木」に「才丸行き」「春季雜詠」「歌譚抄を讀て」を發表す。五月二十二日、發程房州を一周し、六月五日歸郷、途中、清澄山八瀬尾の谷に炭焼を見一週日を送る。この頃より改良炭焼を研究し庭前に炭竈を築き醋酸石灰の製造を試む。七月、「馬酔木」に「房州行」及「炭焼くひま」を發表す。八月、十八日發程、房州より甲斐、諏訪、木曾、美濃、近江湖畔、京都、丹波、丹後、攝津、伊勢に遊び、九月十三日歸郷。諏訪にて志都兒、勘内、柿乃村人と共に霧ヶ峰に登る。九月、「馬酔木」に「枯桑漫筆」を、十一月、

「馬酔木」に「羈旅雜詠」を發表す。

明治三十九年 二十八歳

一月、「馬酔木」に、長詩「鬼怒沼の歌」を、二月、「氷塊一片」を、三月、寫生文「瘼のあと」及び「亂礁飛沫」を發表す。六月より七月に互りて、常陸平潟港に療養す。七月、「馬酔木」に青果の號を以て寫生文「炭焼の娘」を發表す。八月より九月、松島、金華山より出羽最上に出で、大沼の浮島を見、米澤より檜原峠を越えて會津に入り、新潟に至り佐渡に航す、還りて彌彦山に登り、中津川の上流秋山の郷を探り、信越の國境苗場山を越えて上州沼田に出づ、此行程四十日。十月、「馬酔木」に「青草集」及び寫生文「須磨明石」を發表す。

明治四十年 二十九歳

三月、「馬酔木」に寫生文「鉛筆日抄」「濱の冬」を、五月、「馬酔木」に長詩「雲雀の歌」及び「早春の歌」を發表す。十月、陸中平泉より羽後象潟地方に遊ぶ。十



一月、「ホトトギス」に寫生文「佐渡が鳥」を發表す。

明治四十一年 三十歳

一月、「馬酔木」に長詩「獨」及び「初秋の歌」を發表す。「馬酔木」此月を以て廢刊す。二月、「アカネ」創刊號に「晚秋雜詠」を發表す。三月、小説「芋掘り」を「ホトトギス」に、寫生文「白甜瓜」を「アカネ」に發表す。四月、京都、奈良、吉野に遊ぶ。「アカネ」に寫生文「松蟲草」を發表す。六月、「アカネ」に「暮春の歌」を發表す。七月「アカネ」に「手紙の歌」を發表す。弟順次郎東京帝國大學工科學を卒業す。九月、榛名山を越え、草津の奥山より切明温泉に遊ぶ。十二月、陸中平泉に遊ぶ。

明治四十二年 三十一歳

一月、「ホトトギス」に小説「開業醫」を發表す。三月、「アララギ」に「旅の日記」を發表す。八月、「ホトトギス」に「菜の花」を發表す。九月、「ホトトギス」に小

説「おふさ」を發表す、十月、平泉、淺蟲温泉、弘前地方より十和田湖に遊ぶ。

「ホトトギス」に小説「教師」を發表す。

明治四十三年 三十二歳

一月、「ホトトギス」に小説「隣室の客」を、「アララギ」に小品「愛せられざる花」を發表す。二月、「ホトトギス」に小説「太十と其犬」を發表す。六月より「東京朝日新聞」に長篇小説「土」を連載す。八月、痔疾を患へ外科手術を受く。「アララギ」に「乗鞍岳を懷ふ」十四首を發表す。冬、岐阜及京都に遊ぶ、此行中岐阜坪井伊助氏を訪ひて竹林研究をなす。

明治四十四年 三十三歳

春、堆肥の研究をなし、また竹林栽培に着手す。七月頃より咽喉に痛みを覺ゆ。十一月、上京、岡田和一郎博士の診察を受け、喉頭結核と診斷せらる。十二月、五日岡田博士の根岸養生院に入院す。



大正元年 三十四歳

二月、「アララギ」に「わが病」を發表す。二月二十二日根岸養生院を退院し、下谷區那須館に止宿す。三月、七日歸郷す。十六日出立、名古屋、月ヶ瀬、笠置を経て、二十二日京都に入る。二十六日京都醫科大學附屬病院に入院す。四月、「アララギ」に「病中雜詠」を發表す。四月十日京都大學病院を退院す。十二日大和吉野山に遊ぶ。十五日再び京都に歸る。二十日京都發、二十二日福岡九州大學にて、久保博士の診察を受く。二十五日福岡を立つて鹿兒島方面に旅行す。二十九日開聞嶽登山、五月、宇土より長崎に航し、七日福岡に歸る。再び久保博士の診察を受く、此月「土」を春陽堂より出版す。六月、對馬に遊ぶ。七月、四日福岡を出立途中、耶馬溪、英彦山、別府、道後、屋島、琴平、高砂、和歌山、高野山、奈良、京都、近江に遊び、九月二十五日歸郷す。此頃より特に佛畫、佛像、釣鐘等に興味を持ち多く古社寺を訪ふ。十一月、上京、下谷那須館

に滞在、岡田氏に就て岡田式靜座法を始め

大正二年 三十五歳

三月、十四日東京發、十九日福岡着、再び久保博士の診察を受く。四月、四日福岡發、宮島、奈良、京都より、伯耆、出雲に遊び、月末歸郷す。七月、三十一日伊藤左千夫逝く。八月、「芋掘」を春陽堂より出版す。十一月、上京、神尾友修氏の金澤病院に入院す。

大正三年 三十六歳

一月、金澤病院を退院、歸郷。三月、十四日神田區橋田茂重氏の橋田内科醫院に入院。五月より「アララギ」に「鍼の如く」を連載す。五月二十九日橋田内科醫院を退院、三十日歸郷。六月、十日三たび福岡に到り、久保博士の診察を受く。二十日、九州大學病院に入院す。八月、退院、日向青島に遊ぶ。九月、福岡に歸り、市外東公園平野屋に滞在、久保博士の治療を受く。



大正四年 三十七歳

一月、「アララギ」に「鍼の如く其五」を發表す。一月四日、九州大學病院に入院。  
 二月、七日夜、昏睡状態に陥り、八日午前十時死去。九日、福岡崇福寺和尚病  
 院の屍室にて讀經の上入棺し、久保博士、曾田、掛下、高崎、西卷、川邊、の  
 醫員平野屋主人及父源次郎、弟順次郎等付添ひ崇福寺に到る。更に讀經あり、  
 一同焼香す。後市外火葬場にて荼毘に附す。法諡を秀岳義文居士といふ。  
 十一日、父源次郎、弟順次郎遺骨を護りて東京着。同夜、小石川小布施邸にて、  
 在京の親戚、友人等通夜す。十二日、遺骨郷里に歸着。三月、十四日佛式を以  
 て葬送す。

長塚節歌集目次

短歌

明治三十三年

1 根岸庵 (九首).....	一
2 森 (二首).....	三
3 吉野園 (十七首).....	四
4 讀平家物語 (七首).....	八
5 瀧 (五首).....	九
6 東宮御西遊 (八首).....	一一
7 祝御着帶歌 (十一首).....	一三
8 海 (一首).....	一五
9 雪 (一首).....	一六
明治三十四年	
I 課題の歌 (五首).....	一七



明治三十五年

2 霞が浦 (八首) ..... 一八  
 3 秋思 (十首) ..... 二〇  
 4 日々の歌 (十首) ..... 二三

明治三十六年

1 ゆく春 (九首) ..... 二七  
 2 うみ亭集 (九十七首) ..... 二九  
 3 悼正岡先生 (十四首) ..... 三三  
 4 筑波山の歌 (七首) ..... 三七  
 5 人々の許に (八首) ..... 三九  
 6 國見山 (二首) ..... 六一  
 1 新年宴會 (一首) ..... 六三  
 2 菩提樹 (七首) ..... 六三  
 3 初雪 (六首) ..... 六五  
 4 筑波登山 (九首) ..... 六七  
 5 妹嫁ぐ (五首) ..... 六九  
 6 桜の芽 (九首) ..... 七一

明治三十七年

1 榛の木の花 (九首) ..... 一一  
 2 春季雜詠 (五首) ..... 一三  
 3 アイヌ (三首) ..... 一五  
 4 花崗石 (二首) ..... 一六  
 5 雜詠 (十六首) ..... 一七  
 6 折にふれて (二首) ..... 二〇  
 7 つくし (三首) ..... 七三  
 8 春雨 (四首) ..... 七四  
 9 海苔 (一首) ..... 七五  
 10 寄鑄物師秀眞 (八首) ..... 七五  
 11 蟬 (二首) ..... 七七  
 12 まつかさ集其一 (十三首) ..... 七八  
 13 西遊歌 (六十一首) ..... 八二  
 14 まつかさ集其二 (十五首) ..... 八三  
 15 雜詠 (十六首) ..... 一〇八  
 16 まつかさ集其三 (二十七首) ..... 一一一



7 夏季雜詠 (三十二首) ..... 一三二  
 8 憶友歌 (十五首) ..... 一四二  
 9 雲の峰 (二首) ..... 一四六  
 10 雜詠 (五首) ..... 一四七  
 11 秋冬雜詠 (三十首) ..... 一四八  
 12 淺間の雲 (七首) ..... 一五〇

明治三十八年

1 霜 (十首) ..... 一五〇  
 2 春季雜詠 (二十首) ..... 一五九  
 3 房州行 (四十八首) ..... 一六三  
 4 炭焼くひま (八首) ..... 一七九  
 5 送征途 (五首) ..... 一八一  
 6 雜詠 (四首) ..... 一八三  
 7 行々子の歌 (八首) ..... 一八四  
 8 諏訪の歌會 (十三首) ..... 一八六  
 9 羈旅雜詠 (百三十六首) ..... 一九〇

明治三十九年

1 氷塊一片 (六首) ..... 一九九  
 2 亂礁飛沫 (十首) ..... 二〇一  
 3 卽景 (二首) ..... 二〇四  
 4 六月短歌會 (五首) ..... 二〇五  
 5 青草集 (四十三首) ..... 二〇六

明治四十年

1 蕨眞君病む (四首) ..... 二〇九  
 2 早春の歌 (九首) ..... 二一〇  
 3 左千夫に寄す (六首) ..... 二一三  
 4 晩春雜詠 (二首) ..... 二一五  
 5 初秋の歌 (十二首) ..... 二一四  
 6 晩秋雜詠 (十八首) ..... 二一六  
 7 蕨樞堂に寄す (十首) ..... 二一〇  
 8 戲寄香取秀眞 (六首) ..... 二六三  
 9 潮音に寄す (八首) ..... 二六四  
 10 手紙の歌 (十五首) ..... 二六六

明治四十一年



1,3002

I 暮春の歌 (十一首) ..... 二七一

2 雑歌 (五首) ..... 二七三

3 濃霧の歌 (十五首) ..... 二七五

4 秋雑詠 (八首) ..... 二七九

明治四十四年

I 乘鞍岳を憶ふ (十四首) ..... 二八〇

明治四十五年

I 病中雑詠其一 (十二首) ..... 二八五

2 病中雑詠其二 (五十一首) ..... 二八八

大正三年

I 鉞の如く其一 (四十七首) ..... 三〇五

2 鉞の如く其二 (四十首) ..... 三一九

3 鉞の如く其三 (三十六首) ..... 三三七

4 鉞の如く其四 (三十九首) ..... 三四三

5 鉞の如く其五 (七十首) ..... 三五六

補遺

I 歌會の歌 (十首) ..... 三八三

33

2 兼題の歌 (七首) ..... 三八五

3 卽景 (五首) ..... 三八七

4 朝顔 (五首) ..... 三八九

5 萩 (三首) ..... 三九〇

6 姫桃 (一首) ..... 三九一

7 竈山 (一首) ..... 三九一

8 霞 (一首) ..... 三九二

長歌

明治三十四年

I 橋 ..... 三九三

2 灯 ..... 三九六

3 浮巢 ..... 三九六

4 わすれ草 ..... 三九七

5 別荘 ..... 三九九

6 蚯蚓鳴く ..... 四〇〇



7 詠鏡毒地慘狀歌……………四〇一

8 楓……………四〇四

9 靈藥の歌……………四〇四

10 ひしこ漬……………四〇七

11 髪……………四〇八

12 冬の夜……………四一〇

13 登筑波山歌……………四一一

14 佛頂山の歌……………四一三

明治三十五年

1 鬼怒川の歌……………四一五

2 夫婦餅……………四一六

3 望筑波山歌……………四一七

4 おちつばき (三首)……………四一八

5 多賀行き……………四二〇

6 白帆……………四二二

7 吾とる弓……………四二三

8 睡猫……………四二四

9 詠蛤歌……………四二四

10 渡舟……………四二六

11 茂り……………四二七

12 自像に題す……………四二八

13 鳥居……………四二九

14 茄子……………四三一

15 賀舉子歌……………四三二

16 あまだれ物語抄……………四三三

17 茸狩……………四三五

18 落栗……………四三六

19 幼子……………四三七

20 左千夫に贈る……………四三八

21 上總行 (二首)……………四三九

明治三十六年

1 狂體十首……………四四〇

2 題馬醉木歌……………四五〇

3 賀出生歌 (二首)……………四五二



4 まつかさ集 (四首).....四五三

5 佛の山.....四五七

6 郷に歸る歌.....四六〇

明治三十七年

1 與萬葉崇拜者歌.....四六三

2 出生を喜ぶ.....四六五

3 くさぐさの歌 (五首).....四六六

4 變調三首.....四六八

5 海底問答.....四七〇

明治三十八年

1 變體の歌 (六首).....四八一

2 鬼怒沼の歌.....四八五

明治三十九年

1 少女.....四九七

2 麥踏む農婦.....四九八

3 利根の川口.....四九九

4 蝸.....五〇〇

69

5 擬お伽噺.....五〇一

6 思ひ出.....五〇三

明治四十年

1 雲雀の歌.....五〇六

2 獨.....五一二

俳句

三十二章(明治三十七年).....五一九

増補

1 潮(七首).....五二三

再補遺

1 初期の歌(三十首).....五二五

2 消息の歌(一首).....五三四

3 つゆ 霜(八首).....五三五

4 消息の歌(一首).....五三八

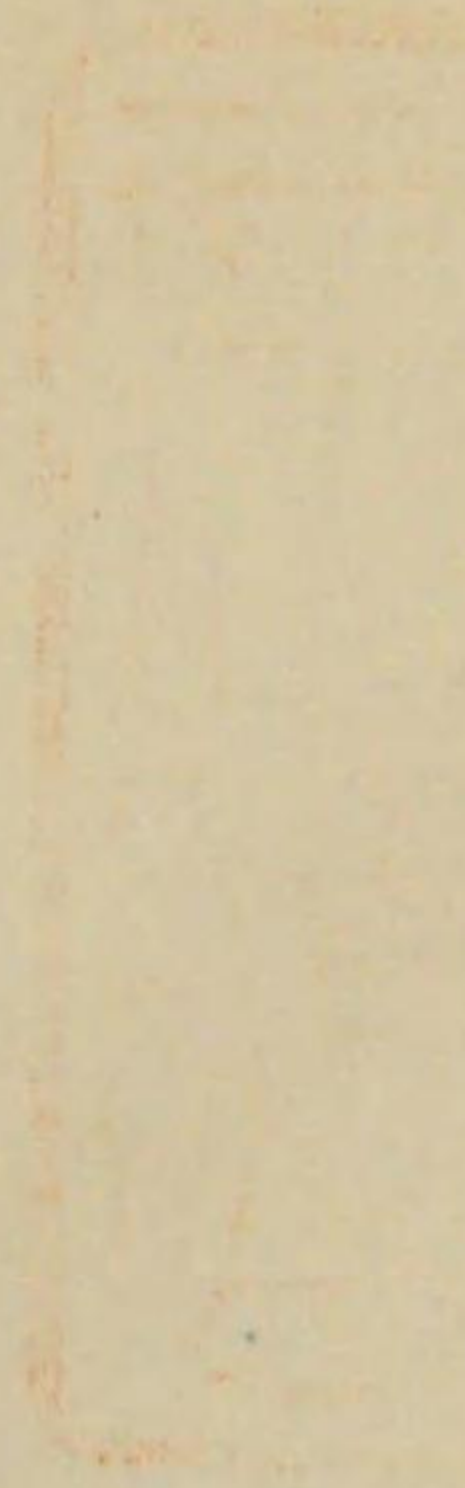
5 消息の歌(二首).....五三八



6	消息の歌(二首).....	五三九
7	消息の歌(二首).....	五三九
8	鶯鳥の歌(一首).....	五四〇
9	消息の歌(一首).....	五四〇
10	「銭の如く」の原稿歌(八十三首).....	五四一

明治三十三年

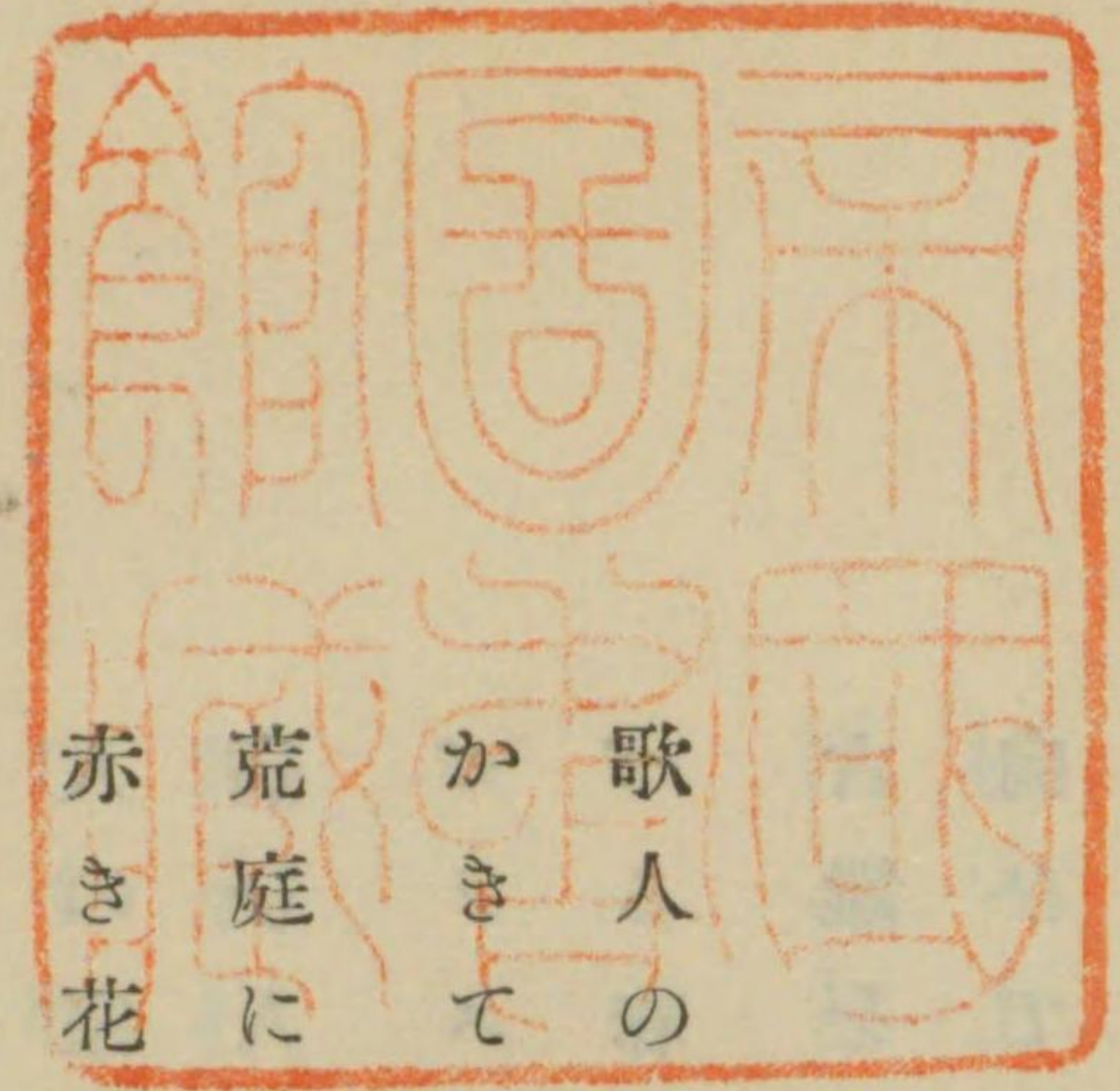




御歌三十三集

根岸庵

竹の里人をおとなひて席上に詠める歌



歌人の竹の里人おとなへばやまひの床に繪をかきてあり  
荒庭に敷きたる板のかたはらにふる鉢ならび  
赤き花咲く

I  
生垣がきの杉の木ひくみとなり屋の庭の植木の青  
芽めふく見ゆ



茨の木の赤き芽をふく垣の上<sup>に</sup>ちひさき蟲の  
 出でて飛ぶ見ゆ  
 人の家にさへづる雀ガラス戸の外<sup>そと</sup>に來て鳴け  
 病む人のために  
 ガラス戸の中にうち臥す君のために草萌え出  
 づる春を喜ぶ  
 古雛を飾<sup>かざ</sup>りひひなの繪を掛けしその床の間に  
 向ひてすわりぬ  
 わか草のはつかに萌ゆる庭に來て雀あさりて  
 隣へ飛びぬ

ガラス戸のそとに飼ひ置く鳥の影のガラス戸  
 透きて疊にうつりぬ  
 枝の上にとまれる小鳥君のために只一聲を鳴  
 けよとぞ思ふ(座上に剝製の鳥あり)

森

野を行けばただに楽しく森行けばこととしも  
 なく物ぞ偲ばゆ  
 すがの根のながながし日も傾きて上野の森の  
 影よこたはる



## 吉野園

六月二十日四つ木の吉野園に遊びて

尖葉とがりばの菖蒲のくさの花さきて白にむらさきに  
園にぎはしも  
四つ柱土にうづめて藁ふきてあやめの園にあ  
づまやを建つ  
梅の木の青葉のもとに雲なしてさける菖蒲に  
ひろき園かも

廣園のあやめの花のはなびらのひとつひとつ  
に風ふきわたる  
菖蒲草その花びらのむらさきを衣きぬにし摺りて  
妹に着せばや  
大きなる菖蒲のつぼみ花になりて萎みし花の  
上をおほひぬ  
はなびらのうすむらさきに紫の千筋いさ百いきい  
きあるあやめ  
菖蒲草しほり隈しなどり品はあれど白とむらさき  
と二つを喜ぶ



あやめ咲く園の細道いくめぐり池をめぐりて  
 亭にいこひつ  
 三つひらの菖蒲の中に六つひらの菖蒲の花の  
 ともしきろかも  
 むらさきの菖蒲の花は黒くして白きあやめの  
 目にたつ夕べ  
 藁ぶきの四阿あますでに灯ともして園のあやめは  
 ただ白く見ゆ  
 菖蒲さく園を訪ひ来てその園に水鶏巢くひし  
 はなしを聞きぬ

ぬば玉の夜のあやめのうねうねは白木綿しらわた布ぬいを  
 しけるが如し  
 ともし火を釣りたる園の四阿あまのまはりに白き  
 あやめ草かも  
 白妙のあやめの上をとぶほたるうすき光をは  
 なちて去りぬ  
 たまたまに出でし螢をめぐらしみ取らむとす  
 れば其光きえぬ



讀平家物語

野に山にたらひわたれるもののふのをたけび  
 なして水鳥たちぬ(富士川)  
 綱とると尻毛手握りむちうてばしりへの方へ  
 馬馳せいだす(同)  
 逃げ去りしいくさの跡にみだれたる弓は弱弓  
 矢は細矢にて(同)  
 かしこきやすめらみことにありながらありと  
 ふ妹が家も知らなく(小督)

かしこきやすめらみことんありながら朝な夕  
 なに妹を戀ふらく(同)  
 人の臣のかしこきかもよ人の君を板屋の中に  
 こめたてまつる  
 君故にさかえし我よわがために衰へたりし君  
 をかなしむ(佛)

瀧

うちわたす二つの瀧の下つせの落合の瀨は木  
 深み見えす



二荒のふもとを行けば野のきはみ山あひにし  
て瀧かかる見ゆ  
二荒の山のつづきの山もとにたぎつ七瀧七つ  
並み落つ

あしびきの山の夕立風あれて瀧のとどろの音  
もきこえず

杉の木のみみたつ山の山おくの雲湧くところ  
瀧落ちとよむ

東宮御西遊

天つ日の日つぎにませば日のみこは國原まね  
くいめぐりたまふ  
とよ秋をきよみさやけみいまだ見ぬ國を見さ  
すといでたたすかも  
たなつものみのらふ秋をよろしみといでます  
空に鶴なきわたる  
みあらかをまだきたたして白雲のたなびく山  
のあなたゆかすも



とこよべにありとふ神は和田の原沖の汐路に  
 玉しくらむか  
 白雲のむかふすかぎり山々は紅葉かつらぎむ  
 かへまつらふ  
 山にゐる毛ものも海の鰭物も秋にしあればみ  
 けのまにまに  
 みとまりの宮居の上にむらさきの夕棚雲はた  
 なびきわたる

東宮御着帶

祝御着帶歌

雲の上のよろこびごときふとのみ思  
 ひはべりしにはや御着帶の事きこえは  
 べれば

むらさきの花をつくりていはひてし月の六か  
 はり秋ふけわたる  
 神ながら契らす秋の長秋をみこのきさいに玉  
 こもります  
 すめろぎのみすゑさかゆく大み代に天なる神  
 は玉くだします



こもらせる玉をたふとみやすらかにあらせた  
 まへといのりたてまつる  
 をにませば日のすゑとほぎめにませば月のす  
 ゑとほぐ玉にいますはや  
 天なるや神のくだせるうづの玉をことほぎま  
 つることのかしこさ  
 かがなべて五つのおよび二をりの十かはり月  
 日さきくといのる  
 こもらせる玉をかしこと山川のきよき河内に  
 宮居みやゐせすかも

かしこきや玉くだらせる國原にかがよふ雲の  
 八重たちのぼる  
 國原に玉くだらせるしるしありてとよの長秋  
 ながくやすらかに  
 天にまし國にいませるもろもろの神のまもら  
 す玉のたふとさ

## 海

住吉のあまにもがもな常世とこよべのをとめが宮に  
 行けらく思へば



雪

あら山の雪にこやせる旅人あはれ家のらばい  
行きて妹に告げやらましを

あはれ家のらばい  
行きて妹に告げやらましを  
あら山の雪にこやせる旅人  
あはれ家のらばい  
行きて妹に告げやらましを

明治三十四年



課題の歌

西吹くや風さむければ網ほせるみぎはの葦に  
氷むすびぬ(氷二首)

氷ある水のそこひの白珠の目にはつけどもと  
りがてぬかも

いはひ瓮へにうま酒みてて埋うめきとふ野べの阜つかさ  
は松木たれたり(酒)

17  
萱刈りて畑なひらきそ麻ま田た比ひ古こが額ひかの片かたへに  
麥蒔かば足り(滑稽二首)



君によりなごむ心はにひ藁に包む海鼠のしか  
とくるごと

霞が浦

常陸國霞が浦に舟を泛べてよみける

葦の邊を榜ぎたみ行けば思ほゆる妹と相見の  
埼近づきぬ  
たづさへて相見の埼のむら松の待つらむ母に  
家苞もがも

沖つ邊にい行きかへらふ蟹舟は若鷺捕らし秋  
たけぬれば  
白波のひまなく寄する行方の三埼に立てる離  
れ松あはれ  
いさり舟白帆つらなめ榜ぐなべに味村騒ぎ沖  
に立つ見ゆ  
霞が浦岸の秋田に田刈る子や沖榜ぐ蟹が妹に  
しあるらし  
ささら萩あしの穂わたる秋風に蟹が家居に網  
干せり見ゆ



草枕旅にしあれば舟うけてことのなぐさに傍  
ぎ廻り見つ

秋思

吾父ひとのことにかつらひ、一たびは  
牢の内にもつながれるが、三とせにな  
れどもことの疑ひはれず、その間心はい  
たましめしこといくそばくぞや、丑の年  
十月のはじめかされて召し出さるるこ  
ととなりければ、うれへあらたに来る思  
ひありて堪へがたくおぼゆるままによ  
めりける

ちちのみの父は行かすもこと分の司のにはへ、  
父は行かすも

吾父にことなあらせそわがために一人の母が  
泣かざらめやは

ちちのみの父を咎めむ掟あらば失せもしなな  
む人知らぬとに

かくのみにつれなき物か世の中に候けし人は  
父はあらなくに

ちちのみの父を念へばいゆししのいためる心  
なぐさもらなく



世の中はわりなき物かまがつみに逢ひてすべ  
 なき父をし念へば  
 月日はもここだも経れどいや日けに憂はまし  
 て忘らえぬかも  
 わがこころなぐさまなくに父もへばまうら悲  
 しき秋の風吹く  
 ははそはの母の命みことがうらさびてうれたむ見れ  
 ば心は泣かゆ  
 いつたりの子等が念ひは久方の天にとほりて  
 人も知りこそ

### 日々の歌

十月二十四日、朝の程よりくもる、舊曆九  
 月の十三日なり

との曇り天の日も見ず吾が待ちし今宵の月夜  
 照らずかもあらむ

二十五日夕ぐれに鳴網を張る

押し照れる月夜さやけみ鳥網あみ張る秋田の面に  
 霧立ちわたる



秋の田の穂の上霧合へりしかすがに月夜さや  
けみ鳴鳴き渡る  
夕されば鳴伏す田居に鳥網張り吾が待つ月夜  
風吹くなゆめ  
秋の田に鳥網張り待ちこのよひの清き月夜に  
鳴とりかへる

二十六日、鉈とりて竹を伐る

むら鳥の峙竹むら下照りてにほふ柿の木ちりにけるかも

二十七日、鬼怒川のほとりを行く

うぐひすのあかとき告げて來鳴きけむ川門の柳いまぞ散りしく

二十八日

秋の田に少女子するて刈るなべに櫛とぬるでと色付きにけり

二十九日、ながしの寺の庭にある白膠木の老木の實を結びたるを見て

くれなるに染みしぬるでの鹽の實の鹽ふけり  
見ゆ霜のふれれば(ぬるでの實は味辛し故)



三十日、雨ふる

秋雨に濡らさく惜しみ柿の木に來居て鳴くか  
も小笠<sup>がさ</sup>かし鳥

明治三十五年



ゆく春

四月の末には京に上らむと思ひ設けしこと  
の叶はずなりたれば心悶そてよめる歌

青傘あさを八やつさしひらく 棕櫚しゅうろの木の花咲く春に  
なりなりにたらずや

穂たらの芽のほどろに春のたけ行けばいまさらさ  
ららに都し思ほゆ

荒小田あらをかへでの枝に赤芽吹き春たけぬれど  
一人ひとりこもり居ゐ



都邊みやこべを戀こひておもへば白楳しろなの落葉らくえつ掃はきつつあ  
 りがてなくに  
 思ふこと更にも成らず枇把びはの樹きの落葉らくえつの春に  
 逢あはくさびしも  
 春畑はるはたけの桑かに霜しもふりさ芽立めたちちのまだきは立たず  
 ためらふ吾われれは  
 くさまくら旅りにも行かず木犀もぎの芽立めたちつ春日はるひは  
 空そらしけまくも  
 にこ毛立けつさし穂ほの麥こむぎの招まねくがね心に思へど  
 行きがてぬかも

おもふことなのさ枝えだの垂花たらしなのかゆれかくゆれ  
 心は止やまず

うみ亭集

成田の梅林を見る

下埴しもは生ぶの成田なりたの佛ほとけをろがむと梅うめ咲く春に逢あひ  
 にけるかも  
 みほとけに參まゐ來くる人の世心よこころに見てを行くべき  
 梅の花これ



あづさ弓春にしあれば梅の花時よろしみと咲  
 きにけるかも  
 いかり綱五百尋杉に包まへる梅の林は見れど  
 飽かぬかも  
 全枝にいまだ咲かねど梅の花散らくを見れば  
 久しくあるらし  
 梅の花疾きと遅きと時はあれど咲きの盛りの  
 木ぬれしよしも  
 梓弓梅咲く春に逢ひしかばおもしろくして去  
 なまく惜しも

まだき咲く梅の林にうぐひすの年の稚みかい  
 かくろひ鳴く  
 うぐひすは五百杉村を木深みと未だも馴れず  
 時稚みかも  
 梅のはな疾きも遅きも春風の和吹く息の觸る  
 らくと否と  
 息長の春かせ吹けば列貫ける秀枝の珠しここ  
 に咲く見ゆ  
 梅の木は花かも咲けるひはつ女の白珠粧ひ今  
 するらしも



白珠は緒にも貫かくと照るといへど枝に貫く  
 珠香さへ包めり  
 鶯の昨くひ持つ花を緒をに貫きていかけ引ければ  
 寄り來こざらめや

香取の梅を見て

吾はもや梅見にきたりこの春は復または見がたみ  
 今日見にきたり  
 かしこくも吾はあるかも春雨の降りての後に  
 梅見すらくは

舟の秀はははるかにあれどここにして振ふり放まき見れ  
 ば梅の上ゆ見ゆ  
 檝か取りのや稻いな幹かくる薦こも槌づちのい行きかへらひ梅  
 見つわれは  
 梅の花咲きも咲かずも川舟の潮うしほ來この見ゆるこ  
 の岡うるはし  
 全木には梅まだ咲かずうべしもよ麥の青薦し  
 きうすくこそ  
 この梅は花のともしも春風の吹きすくなみか  
 花の乏しも



利根川を渉る

焼鎌の利根の川門に萱はあれど手長廣生と刈りもあへぬかも

利根川を打ち越え來れば鳥網張る湖北村にうぐひす鳴くも

印旛沼

伊丹庭の湖網引き船漕ぐ葦の邊の和の春風いまだ寒みか

雙生丘

雙生の椿咲く丘はしきよし花はつらつら樹さへつらつら



二兒は椿さはなれどひた丘に木垂り木根立ちしかさは見えす

利根川の葦原を過ぎて鬚うすき人を思ひよせて戯れたる歌五首

葦株は焼けばさは萌ゆ葦の如萌ゆるものぞ焼かせその鬚

刈株の株の焼生に焼けのこる葦の古穂にさね似たる鬚

春風はい吹き渡れどうすき鬚葦にあらねば萌えぬその鬚



焼株やきくの灰搔かき持もちてこり塗ぬらば蓋ふたしか萌もえむ  
そのうすき鬚すげ  
やけ株やけくの灰かこり塗ぬらば正まさ髻ひげと人ひとかも見みらむ本もと  
あら小髻こひげ

消息しよせきのはしにかき付けて人々の許へや  
りたる中

葛くわ飾しの梅うめ咲さく春はるを見みに行いかむたどきも知しらず  
一人ひとりこもり居ゐ居ゐ（本所へ三首）

木下きのね川がはの梅うめの林はやしに撓かた細この吾われが見みし少女しょうじよわすれ  
かねつも

わが宿しゆくは人の來きぬ宿しゆく人はくれど梅うめ見みに來きつと  
人の來きぬ宿しゆく  
さ蕨わづらの萌もえ出でづる春はるに二ふたたびもい行いかむ山の  
筑波つくはしうるはし（筑波のふもとへ二首）  
さ蕨わづらの人ひと來き人ひと來きとさし招まく春はるにし逢あはばたぬ  
しけまくも

二月二十五日筑波山に登りて國見して  
作れる歌

筑波つくは嶺のりゆ振ふりさけ見みれば水みづの狭せま沼ぬま水みづの廣ひろ沼ぬま霞かすみ  
たなびく



御鏡の息吹のはしに曇るなす國つ廣原かすみ  
 たる見ゆ  
 筑波嶺の巖根踏みさぐみ國見すと霞棚引き隔  
 てつるかも  
 春霞い立ち渡らひ吾妻のやうまし國原見れど  
 見えぬかも  
 筑波嶺の的背面に見つれども霞棚引き國見  
 しかねつ  
 春がすみ立ちかも渡る佐保姫の練の綾絹引き  
 干せるかも

佐保姫の練綾絹のあやしかも國土ひたに覆へ  
 る見れば  
 うす絹と霞立ち覆ひおぼろにも國の眞秀ろの  
 隠らく惜しも  
 地祇み合ひしせさす春とかも練絹おほひ人に  
 見えすけむ  
 思ほゆることの如くは練絹の霞のころも裁た  
 まくし思ほゆ

下妻なる狭沼のほとりは吾幼き折のすみとな  
 りければ見るに懐しき思ひぞすなる、今年の春  
 舟を泛べて漫に昔の事など思ひいでければ



わらははべに吾ありしかば舟競ひ潜きせりける  
狭沼ぞこれは

これはもや水たまりの沼種おろす八十水田村

へ水くまりの沼

蘆角の萌ゆる狭沼の埴岸に舳とき放ちて吾ひ

とり漕ぐ

岸のべの穂立柳は茂れどもありける家を見ぬ

がともしさ

いにしへの二もと柳妹に別れひともと立てり

水付く柳

二もとありける柳妻なしにただ一本にあるが

うれたさ

水付くやひともと柳人ならば言問はましをひ

ともと柳

わか草の妻覓ぎかねてひとりある柳を見れば

昔おもほゆ

妹柳今もさねあらば舟寄せて見て行かまくの

朽ちにけるかも

狭沼邊のひともと柳木根高に立ちさかゆとも

一もと柳



白波の手揺り振らばひひまもなき一もと柳妻  
なしにあはれ

五月雨もいつしか霽れて土用ともなれ  
ば日々に暑けくなりまさりてたへがた  
くおぼゆるものからなほ涼しさを求め  
てえがたきことのあらめやおもひつ  
づけてよめる

竹箒たかほうき手にとり持ちて散り松葉あさなあさなに  
掃くがすすしさ  
鋸のわたるくぬぎ柵の切株ききのわか木むら立ちたつが  
すすしさ

かぎろひのゆふつみ茄子なすびさくさくに菜刀もち  
て切るがすすしさ(菜刀は方言なり庖丁をいふ)  
野老とろづらませがおどろを刈りそけて足あうらしみみ  
に踏むがすすしさ  
穴ごもりくろ行くけら蝮の夕さればころろころ  
ろになくがすすしさ  
にはつとりかけのかひこに根芽ねめつなぎはつな  
る瓜のなるが涼しさ  
こも槌のかたみに包む皮剥げて竹の肌はだを見る  
がすすしさ



いたいたしき枝がうれに玉むすぶ青山椒を噛  
 むがすすしき  
 手握にぎりの弓のたわめる皂莢さいかちのさゆらさゆらにゆ  
 るがすすしき  
 末つみにつむや藜あかぎをとり茹でて手桶の水にさ  
 すがすすしき(さすは方言なりして)

佛頂山の歌

石きざむ佛の山は青菅のしげき茂峯しほをに雲たち  
 わたる

八月四日、雨ふる、下妻にやどる

草枕旅に行かむと思へるに雨はもいつか止ま  
 む吾がため

五日、あさの程くもり、五十日に及びて雨はれず

苧をだまきを栗の垂れ花刺しがむすび日はへぬれど  
 も止まぬ雨かも

午後にいたりて日を見る

おぼほしく降りける雨は青箱うまくさの立秀たちほの上に晴  
 れにけるかも

八日、立秋



46 久方の雨やまなくに秋立つとみそ萩の花さきにけるかも

十二日、雨、この日下づまに在り、友なるもの、いたづける枕もとに、さまざまの話してあるほどに、房州の那古にありける弟おもひもかけず來り合せたるにくさぐさのことなききて

鳥賊釣に夜船漕ぐちふ安房の海はいまだ見ねども目にし見えくも

十四日、きぬ川のほとりを行く

桜の木は芽立つやがてに折らゆれどしげりはしげし花もふさふさ

廿五日、ものへ行く、棚に垂れたる絲瓜のふとしきを見て

秋風は吹きもわたれかゆらゆらに絲瓜ちまの袋垂れそめにけり

青袋へちま垂れたりしかすがにそのあを袋つぎ目しらすも

夏引の手引の絲をくりたたね袋にこめてたれし絲瓜か

廿八日、芒の穂みえそむ

47 秋風はいまか吹くらし小林に刈らでの芒穂にいでそめつ



卅一日、成田へ行かむと夜印旛沼のほとりを通ぐ

ぬば玉の夜にしあれば伊丹庭の湖さやに見え

ねどはろばろに見ゆ

豎長の横狭の湖ゆ見出だせばおほにたな引き

天の川見ゆ

いにはの湖水田稻村めぐれどもまさしに見え

す夜のくらければ

大船の楫取の稻田はるばるに見さくる丘の雙

生しよしも

九月一日、滑川より雙生丘をのぞむ

雙生丘にのぼる利根川の水その下を浸して行く形の瓢に似たるもの面白ければ

くすの木の木垂るしげ丘は秋風に吹かれの瓢

ころぶすが如し

秋風はいたくな吹きそ白波のい立ちくやさば

瓢なからかむ

秋風の吹けどもこけすひた土のそこひの杭に

つなぐひさごか

なりひさご豎さに切りて伏せたれどその片ひ

さごありか知らなく



二日、利根川のほとりに人をたづね、打ち渡す稲田おほかたは枯れはてたり、いかなればかと問へば雨ふりつづきて水満ちたへたれども落すすべを知らず、日久しくしてかくの如しといふ

甘あま稻いねのみのりはならず枯れたるに水満てるかも引くとはなしに

久方の天くだしぬる雨ゆるに稲田もわかずひたりけるかも

まがなしく枯れし稲田をいつとかも刈りて收めむみのらぬものを

日のごとも水は引けども秋風あきかぜのよろほひ稲に吹くが寂さびしさ

三日、印旛沼のほとりを過ぐ

しするのや柏木村かしらぎむらを行き見ればもく採る舟かつらに泛うけるは（りもくは方言な）藻もくはをいふ

味村あじむらのつららの小舟葦邊あしべにか漕こぎかくりけむ見れども見えす

四日、藤氏ふじうぢに導れて杉山すぎやまを攀のぼるぼるとて

睦岡むつおかの埴谷はにやの山はいばらつら足深あそかにわけて越ゆる杉山



とよみけるがいたくあやまりたり、この  
わたりの杉山ことごとく下草刈りそけ  
て見るに涼しげなり

陸岡の五百杉山はした草の利鎌にふりて見る  
にさやけし

千葉の野を過ぐ

千葉の野を越えてしくれば蜀黍の高穂の上に  
海あらはれぬ  
もろこしの穂の上に見ゆる千葉の海こぎ出し  
船はあさりすらしも

百枝垂る千葉の海に網おろし鱒かも捕らし船  
さはにうく

### 悼正岡先生

九月十九日、正岡先生の計いたる、この日  
栗拾ひなどしてありければ

年のはに栗はひりひてささげむと思ひし心す  
べもすべなさ  
ささぐべき栗のここだも搔きあつめ吾はせし  
かど人ぞいままさぬ



54 なにせむに今はひりはむ秋風に枝のみか栗ひ  
たに落つれど

二十日、根岸庵にいたる

うつそみにありける時にとりきけむ菅の小蓑  
は久しくありけり

二十三日、おくつきに詣でて

かくのごとしきみ櫛の枝は手向くべくなりにし君は  
悲しきろかも

笥にもりてたむくる水はなき人のうまらにき  
こす水にかもあらむ

廿五日、初七日にあたりふたゝびおくつ  
きにまうでぬ、寺のうら手より蜀黍のし  
げきがなかを歸る

吾が心はたも悲しもともずりの黍きびの秋風やむ  
時なしに

秋風のいゆりなびかす蜀黍もろこしの止やまず悲しも思  
ひしもへば

もろこしの穂ぬれ吹き越す秋風の寂しき野邊  
にまたかへり見む

55 秋風のわたる黍野を衣手のかへりし來れば寂  
しくもあるか



十月九日、三七日にあたりぬ、ばるかに思  
をばせてよみはべりける

まうですと吾が行くみちにもえにける青菜は  
いまかつむべからしも  
いつしかも日はへにけるかまうで路のくまみ  
にもえし菜はつむまでに  
なぐるさの遠さかり居て思はずは青菜つむ野  
をまた行かむもの  
青雲の棚引くなべに目かげさし振りさけ見れ  
ば都はとほし

### 筑波山の歌

十一月十八日、筑波山に登りてよめる

狭衣ころものを小筑波つくは嶺ねろのたをりには萱ぞ生ひたる  
苦のふき萱

筑波嶺をいや珍らしみ刈れれどもまた生の萱  
のまたも来て見む

筑波山を望みてをりをりによみける

57  
おくて田の稻刈るころゆ夕されば筑波の山の  
むらさきに見ゆ



夕さればむらさき匂ふ筑波嶺のしづくの田居  
に雁鳴き渡る

蜀黍の穂ぬれに見ゆる筑波嶺ゆ棚引きわたる  
秋の白雲

稲の穂のしづくの田居の夜空には筑波嶺越え  
て天の川ながる

筑波嶺に降りおける雪は陽炎の夕さりくれば  
むらさきに見ゆ

人々の許に

一

いにしへのますら武夫も妹に戀ひ泣きこそ泣  
きけれその名は捨てず  
世の中は足りて飽き足らず丈夫の名を立つべ  
くは貧しきに如かず

二

沖の浪あらし吹くとも蟹小舟おもふ浦には寄  
るといはすやも



葦邊行く船はなづます沖浪のあらみたかみと  
檝とりこやす

三

明治三十五年の秋あらし凄まじく吹き  
すさびて大木あまた倒れたるのちさま  
さまの樹木に返り咲きせし頃筑波嶺の  
おもてに人を尋ねてあつきもてなしを  
うけて程へてよみてやりける歌

いづへにか路はおひける棕櫚の葉に枇杷の花  
散るあたりなるらし  
苦きもの否にはあれどあつものにがくうまけき路  
の臺よろし

くくたちの落の小苞をばかまひた掩ひきのおもしろき  
落の小苞  
秋まけて花さく梨の二たびも我行けりせばたら  
は伐りこそ

國見山

十月十六日常毛二州の境に峙つ國見山  
に登りてよめる

茨城は狭野にはあれど國見嶺に登りて見れば  
稻田廣國







新年宴會

利鎌<sup>とがま</sup>もて刈りゆふ注連<sup>しめ</sup>の年のはにいやつぎ行  
かむ今日の宴<sup>うたげ</sup>は

菩提樹

常陸國下妻に古刹あり光明寺といふ、門外に一株の菩提樹あり、傳へいふ宗祖親鸞の手植せし所と、蓋し稀に見る所の老木なり、院主余に徴するに菩提<sup>ぼだい</sup>の歌を以てす、乃ち作れる歌七首



天竺の國にありといふ菩提樹ををつつに見れば佛おもほゆ

善き人のその掌たなごこにうけのまば甘くぞあらむ菩提樹の露

世の中をあらみこちたみ嘆く人にふりかかるらむ菩提樹の華

菩提樹のむくさく華の香を嗅げば頑固かたくな人もなごむべらなり

菩提樹の小枝さへが諸葉のさやさやに鳴るをしきかば罪も消ぬべし

ここにして見るが珍しき菩提樹の木根きね立ち古りぬ幾代へぬらむ  
うつそみの人のためにと菩提樹をここに植ゑ  
けむ人のたふとき

初雪

一月二十日、きのふより夜へかけて降りつづきたる雨のやみたるにつとめておき出でて見れば筑波の山には初雪のふりかかりたればよめる歌六首



おぼほしく曇れる空の雨やみて筑波の山に雪  
 ふれり見ゆ  
 よもすがら雨の寒けくふりしかば嶺の上には  
 雪ぞふりける  
 をのうへにはだらに降れる雪なればここのあ  
 たりはうべ降らずけり  
 筑波嶺の茅生ちぶの萱原さらさらにここには散ら  
 ずふれる雪かも  
 二なみの山の峽間にふりしける雪がおもしろ  
 はだらなれども

筑波嶺にふりける雪は白駒の額毛かみに似たり消  
 えすもあらぬか

筑波登山

二月五日筑波山に登る、ふりおける雪ふ  
 かりければ足の疲れはなほだしくお  
 ぼえぬ、その夜のほどにふみける歌

足曳の山をわたるに惱ましき行かじものを  
 山がおもしろ  
 柞葉のははそのしばのしばしも立ち休ら  
 ふ山の八十坂やそさか



藁ひこはゆえのたぐひて行かむ人なしにひとり越ゆれば  
 なやましき坂  
 さやさやに利鎌さしふる楛木しもとぎのなよなよしも  
 よ山路こゆれば  
 くさまくら旅ゆきなれし吾なれど山坂越せば  
 いたし足あうらはは  
 筑波嶺にこりたく樵ぶなのもゆるなす思ひかねつ  
 つ足はなやみぬ  
 肉しむらの引かゆがごと思ほえて脛はすのふくれ  
 のいたましき宵

桑の木の木ぬれをはかる青蟲のかがめて居れ  
 ばいたき足かも  
 小衾こきんのなごやが下にさぬらくのすがすがしも  
 よ足疲れれば

妹嫁ぐ

三月十四日、妹とし子あすは嫁がむとい  
 ふに、夕より雨のいたくふりいでたれば

さきはひのよしとふ宵の春雨はあすさへ降れ  
 どよしといふ雨



春雨に梅が散りしく朝庭に別れむものかこの  
夜過ぎなば

宵すぎるほどに雨やみてまどかなる月  
いづあすはよき日と思はれければ

しばしばもよそは装ころもひ衣ぬぎかへむあすの夜寒くあ  
りこすなゆめ

なほ思ひつづけける

柞葉の母が目かれてあすさらばゆかむ少女を  
まもれ佐保神

夜をこめてあけの衣は裁たちぬひし少女が去いな  
ば寂しけむかも

### 桜の芽

四月十七日、雨ふる、うらの藪のなかへ入  
りて見るに桜の木の芽いやながに萌え  
出でたり、亡師のもとへとしどしにおく  
りけるものを、いまはそれもすべなくな  
りぬ

朝さらすつぐみなくなる我が藪の桜たちの木みれ  
ば萌えにけるかも

春雨の日まねくふれば桜たちの木の萌えてほうけ  
がぬ入りも見ぬとに



たらの木のもゆらくしるく我が藪の辛夷の花  
 は散りすぎにけり  
 楮刈るわが竹藪のたらの木は伐らずぞおきし  
 もえば折るべく  
 春雨に濡れつつたらは折らめどもをりきと告  
 げむ人のあらくなく  
 藁つつみたらの木の芽はおくらまく心はいま  
 は空しきろかも  
 めでぬべき人もあらぬに徒にもえぞ立ちぬる  
 そのたらの芽を

折らゆればすなはち萌ゆる桜の芽のまたも逢  
 ふべき人にあらなくに  
 春雨のしきふる藪のたらの木のいたくぞ念ふ  
 そのなき人を

つくし

むかし我がしばしば過ぎし大形のおぼた小松が下は  
 つくしもえけり  
 つくつくしもえももえずも大形のおぼた小松が下に  
 行きてかも見む



つくしつむ方も知らえず大形に行きてを見な  
む昔見しかば

春雨

ほろほろと落葉こぼるるゆづり葉の赤き木ぬ  
れに春雨ぞふる

春の夜の枕のともし消しもあへずうつらうつ  
らにいねてきく雨  
春雨の露おきむすぶ梅の木に日のさすほどの  
おもしろき朝



あふぎ見る眉毛にかかる春雨に傘さしわたる  
月人をとこ

海苔

品川のいり江をわたる春雨に海苔干す垣に梅  
のちる見ゆ

寄鑄物師秀眞

小鼠は栗も乾鯉も引くといへどさぬるふすま  
も引くらむや否



うつばりのたはれ鼠が拷繩たがなのひきて行くちふ  
ひとりさぬれば

櫃びの實のひとりぬればに鼠だに引くとさはい  
ふひとりはないね

嫁が君としかもよべども木枕をなめてさねな  
む鼠ならめやも

いとこやの妹とさねてば嫁が君ひくといはじ  
もの妹とさねてば

嫁が君よりてもこじを妹がかた鑄てもさねな  
な冷つめたかりとも

みかの瓮かめに鼠おとしもおとさずも妹とさねて  
ば引くといはなくに

小鼠こねの引くといふものぞ特牛ことひうしの角つゝのふくれは  
つつましみこそ

蟬

那須の野の萱原過ぎてたどりゆく山の檜ひの木  
に蟬せみのなくかも

豆まめ小豆あづきしげれる畑の桐の木にひぐらしなくも  
あした涼しみ



まつかさ集 其一

梧桐の梢おもしろく見えたれば

青桐のむらなる莢のさやさやに照れるこよひ  
の月の涼しさ

また庭のうちに榎の樹あり過ぎしころ  
は夜ごとに梟の鳴きつときけば

ふくろふの宵々なきし榎の樹のうつろもさや  
に照る月夜かも

おなじく庭のうちになる樟の木のきらき

らとかがやきたるを主の女の刀自のい  
と美しきものと稱ふれば我が刀自にか  
はりてよみける

秋の夜の月夜の照れば樟の木のしげき諸葉に  
黄金かがやく

一日小雨、庭上に梅の落葉せるを見てよ  
める歌四首

秋風のはつかに吹けばいちはやく梅の落葉は  
あさにけに散る  
あさにけに落葉しせれば我が庭のすすろに寂  
し梅の木の秋



朝さらす立ち掃く庭に散りしける梅の落葉に  
秋の雨ふる

我が庭の梅の落葉に降る雨のさむき夕にこほ  
ろぎのなく

渡邊盛衛君は予が同窓の友なり出でて  
商船學校に學び汽船兵庫丸の三等運轉  
士たり本年六月十四日遠洋航海の途次  
同乗の船員數名と共に小笠原群島母島  
の測量に従事し颶風に遭ひて遂に悲惨  
の死を致す八月三十日舊友知人相會し  
て追悼の式を擧げ聊か其幽魂を弔ふ予  
も亦席に列る乃ち爲めに短歌八首を詠  
す録六首

ますらをは船乗せむと海界うなざかの母が島邊にゆき  
てかへらす

小夜泣きに泣く兒はごくむ垂乳根の母が島邊  
は悲しきろかも

ちちのみの父島見むと母島の荒き浪間にかづ  
きけらしも

はごくもる母も居なくに母島のいたぶる浪に  
臥こせるやなぞ

鱻なまこの寄る母が島邊に往きしかば歸りこむ日の  
限り知らなく



秋されば佛をまつるみそ萩のはなも咲かずや  
荒海の島

西遊歌

七月二十五日、大阪桃山にあそぶ

ひた丘に桃の木しげる桃山はたかつの宮のそ  
のあとどころ

二十六日、四天王寺の塔に上る

刻楷<sup>きき</sup>を足<sup>あ</sup>讀<sup>よ</sup>み片<sup>かた</sup>讀<sup>よ</sup>みのぼり行く足<sup>あ</sup>うらのしも  
ゆ風吹ききたる  
押照るや難波の海ゆ吹きおくる風のすすしき  
この塔の上

二十七日、泉布観後庭

あふちの枝もうごかず暑き日の庭にこぼるる  
白萩のはな  
あぶら蟬しきなく庭の青芝に散りこぼれたる  
白萩のはな

二十八日、安倍野を過ぐ



畝<sup>うぶ</sup>なみに藍刈り干せる津の國の安倍野<sup>あべの</sup>を行けば暑<sup>あつ</sup>しこの日は

和泉國に陵を拜がむと舳の松といふところを行くに、芒のさわさわと靡きたるを見てよめる

大ふねの舳<sup>へ</sup>の松の野の穂芒は陵のへになびきあへるかも

仁徳大帝の山陵を拜す中の陵といふ

和泉は百舌鳥<sup>もず</sup>の耳原耳原のみささぎのうへにしげる杉むら

すこし隔たりたる南の陵といふを拜みまつるに、松の木の生ひしげりたれば

うなねつき額<sup>ぬか</sup>づきみればひた丘の木の下萱のさやけくもあるか

おなじく北の陵へまがる途にて

向津井の稗<sup>ひえ</sup>は穂に出づ草まくら旅の日ごろのいや暑けきに

北の陵にて

物部の建つる楯井のみささぎにまつると作れその菽<sup>ま</sup>も稗<sup>ひえ</sup>も

舳の松にて

雨ないたくもちてなよせそ茅渟<sup>ちぬ</sup>の海や淡路の島に立てる白雲



住吉の松林を磯の方に打出でてよめる  
住吉の磯こす波の夕なぎに鷺とびわたれむら  
松がうれゆ

三十日西京なる東山のあたりを行くと  
て清閑寺の陵にいたる道すがらよめる

さびしらに蟬鳴く山の小坂には松葉ぞ散れる  
その青松葉

三十一日、比叡山の頂にのぼりて潮のあ  
なたに田上山を望むに、折柄山の上なる  
空に雲のむらむらとうかび居たれば

比叡の嶺ゆ振りさけみれば近江のや田上山は  
雲に日かげる

息吹の山をいや遙にみて

天霧ふ息吹の山は蒼雲のそぐへにあれどただ  
に見つるかも

極めてのどかなる潮のうへに舟のあま

た泛びたるをみて

近江の海八十の湊に泛く船の移りも行かず漕  
ぐとは思へど

丹波の山々かくれて夕立の過ぎたるに

辛崎のあたりくらくらなりたれば

鞍馬嶺ゆ夕だつ雨の過ぎしかばいまか降るら  
し滋賀の唐崎



八月一日、嵐山に遊ぶ、大悲閣途上

さやさやに水行くなべに山坂の竹の落葉を踏  
めば涼しも

二日、ひるすぐるほどに奈良につく、あり  
といふ鹿の見えざるに、訝しみて人にと  
ひなどしつ

春日野の茅原を暑み森ふかくこもりにけらし  
鹿の見えこぬ

春日山しげきがもとを涼しみと鹿の臥すらむ  
行きてかも見む

嫩草山にのぼるに萩のやうなるものの

見れど飽かぬ嫩草山に夕霧のほのぼのにほふ  
くさ萩の花

おびただしく生ひたるが、ささやかなる  
白き花の咲きたるを、捨てがたくおもへ  
ば麓なるあられ酒うる家の主にきくに、  
草萩といふといへば

三日、大和國たふの峰にやどりて鼻のな  
くをききてよめる

ゆふ月の光り乏しみ樹のくれの倉梯山にふく  
ろふのなく

四日、初瀬へ行くに艾うる家のならびた  
れば



こもりくの初瀬のみちは艾もぐさなす暑あつけくまさる  
倚る木もなしに

三輪山へいたる途にて

味酒あじ三輪のやしろに手向けせむ臭木くさぎの花は翳  
してを行かな

三輪の檜原のあとといふを、山守にうち  
びかれてよみける

櫛御玉くしのみたま大物主の知らしめず三輪の檜原は荒れ  
にけるかも

耳なし山をのぞむ、木立のしげきに梶の  
木のおほきといへば

耳成みみなりの山のくちなし樹がくりくりに咲く日の頃は  
過ぎにけらしも

五日、樞原の宮に詣つ

葦はらや八百やほ湧きのぼる満潮の高知りいます  
神の大宮

やしろの庭のかたほとりに、かたばかり  
なる葦原あり、そこに水汲む井のありけ  
れば

樞原の神の宮居の齋庭いはいには葦ぞおひたる御井  
の真清水  
樞原の宮のはふりは葦分に御井みいは汲むらむ神  
のまにまに



橋寺より飛鳥へ行くみちのかたへに逝  
回の丘といふにのぼりて

たびびとの逝ゆき回の丘の小畠には煙草の花は咲  
きにけるかも

八日、大阪より伊勢へこえむと木津川の  
ほとりを過ぐ

やま桑の木津のはや瀬ののぼり舟綱手かけ曳  
く帆はあげたれど

伊勢路に入りてよめる

日をへつつ伊勢の宮路に粟の穂の垂れたる見  
れば秋にしあるらし

九日、外宮より内宮に詣づ、目にふるる物  
皆たふとく覺ゆるに白丁のほのめくを  
見てよめる

かしこきや神の白よほ丁は眞さやけき御裳濯川に  
水は汲ますも

白よほ栲のよぼろのおりて水は汲む御裳濯川に口  
漱ぎけり

蘿蒸せる杉の落葉のこぼれしを白丁はひりふ  
宮の垣内に

この日、鳥羽の港より船に乗りて熊野へ  
志す



加布良古の三崎の小門を過ぎくれば志摩の浦  
曲に浪立ち騒ぐ

麥崎のあられ松原そがひみにきの國山に船は  
へむかふ

大和嶺に日が隠ろへば真藍なす浪の穂ぬれに  
文鯨魚の飛ぶ見ゆ

真熊野のしづけき海に飛ぶ文鯨魚の尾鰭張り  
飛び浪の穂に落つ

おもしろの文鯨魚かも楫まくらこれの船路の  
思ひ出にせむ

十日よべ一夜は船にれて、ひる近きに勝  
浦といふところへつく、沖の方より向ひ  
の山に一條の白きが落ち懸れるを見る

三輪崎の輪崎をすぎて立ちむかふ那智の檜山  
の瀧の白木綿

那智山をわけて瀧の上にいたりみるに  
谷深くして、はるかに熊野の海をのぞむ

丹敷戸畔丹敷の浦はいさなとる船もうかばす  
浪のよる見ゆ

谷ふかみもろ木はあれど杉がうれを真下に見  
れば長きろかも



やどりの庭よりは谷を隔ててまのあたりに瀧のみゆるに、月の冴えたる夜なりければふくるまでも寝すてよみける

真熊野の熊野の浦ゆてる月のひかり満ち渡る  
那智の瀧山

みれど飽かぬ那智の瀧山ゆきめぐり月夜に見たり惜しけくもあらず

真熊野や那智の垂水たるみの白木綿のいや白木綿と月照り渡る

人みなの見まくの欲れる那智山の瀧見るがへに月にあへるかも

この見ゆる那智の山邊にいほるとも月の照る夜は常つねにあらめやも

十一日つとめて本宮へこえむと、大雲取峠といふをわたるにやがて暑さはげしくなりてたへがたければ、しばしば水をむすびて喉をうるほす

虎杖いたどりのおどろが下をゆく水の多藝津たぎつ速瀬はやせをむすびてのみつ

真熊野の山のたむけの多藝津瀬に霑れ霑れさける虎杖いたどりの花

さらに小雲取峠といふにかかる、木立稀なれば暑さいよいよきびしくして思ひ



のままにはえもすすまず、汗おし拭ひおし拭ひてはやすらふ程に、羊齒のしげりたるを引きたぐりてみれば七尺八尺のながさなるを、珍らしく思ふままにをりて持て行くとして

かがなべて待つらむ母に眞熊野の羊齒しだの穂長を箸にきるかも

十二日、熊野川へそそぐきたやま川といふ川ののぼりに瀕八丁といふをみむと竹筒といふところより山越えて

竹筒たけとのや樛の木山の谷深み瀬の音はすれど目にもみらえず

十三日、舟にて熊野のを下る

熊野川八十瀬を越えてくだりゆく船の筵むしろにさねて涼しも

十四日、きのふ新宮より七里の松原を海に添ひて木の下までたどりける日くれて花の窟といふところのほとりにやどりてつとめておきいでて窟を拜む、遠くよりきたれる山の脚のにはかにここにたえたるさまにて、岩の時ちたるに潮のよせきて穿ちけむと思はるる穴のところどころに見ゆ、沖は湊ぎたれば磯うつ浪もゆるやかなるを、窟にひびくおのとどろとどろと鳴るさま凄まじきばか



りなるに、あれたらんほどのこと思ひや  
らる、伊弉册神をここにはふりまつりけ  
るよしいひつたへて昔より蚕どもの花  
をささげてはいつきまつりけるところ  
と聞きて

鯖釣りに沖こぐ蚕もかしこみと花たむけしゆ  
負へるこの名か

真くま野の浦曲にさける筐柳われもたむけむ  
花の窟に

熊野より船にて志摩へかへると、夜はふ  
れに寝てあけがたに鳥羽の港につきて  
そこより伊勢の海を三河の伊良胡が崎

にいたる

三河の伊良胡が崎はあまが住む庭の真砂まごに松  
の葉ぞ散る

十六日、つとめて伊良胡が崎をめぐりて  
よめる

いせの海をふきこす秋の初風は伊良胡が崎の  
松の樹を吹く  
しほさるの伊良胡が崎の萱草わすれぐさなみのしぶきに  
ぬれつつぞさく

十七日、駿河の磯邊をゆきくらしして江尻  
までたどり行かむとてよめる



清見潟三保のよけくを波ごしに見つつを行か  
む日のくれぬとに

十八日、箱根の山をわたりてよめる

箱根路を汗もしとどに越えくれば肌冷かに雲  
とびわたる

松かさ集 其二

西の都を見にまかりてまる山といふ所にい  
きけり、芋棒となむいふ家に入りて晝餉した  
たむる程にあとよりきたる女どもの、盛り傾  
ぶきし齡にも有らねば、ばでやかなるさまに

粧ひけるが、隣の間へいりたるを、暑き日の盛  
りとして隔ての葭戸は明け放ちたるままなり  
ければ、京の女といふもの珍らしく思ひて見  
る程、怪しくも帯解きやり帷子なりけるが片  
へに脱ぎ捨ててゆもじばかりになりてぞ酒  
汲み始めける、ほしたなき女どもの振舞かな  
と、興さめ果てて胸苦しくぞ覺えしや、只管に  
よき衣の汗ばみて汚れなむことを恐れける  
とかや、後になりてぞ聞き侍りし

からたちの荆棘いばらがもとにぬぎ掛くる蛇の衣ころもに  
ありといはななくに

篠のめをさわたる蛇の衣きぬならばぬぎて捨てむ  
にまたも着めやも



比叡の山のいただきなる四明が嶽にのぼりて雨にあひ、草の茂りたる中を衣手しとどに沾れて八瀬の里へ下らむと、祖師堂のほとりに出づ、杉深くたちこめたる谷をうしるに白木槿のやうなる花のさきたる樹あり、沙羅雙樹といふといふ、耳には馴れたれども目にはいまはじめてなり、まして花の盛なれば珍らしきこと極りなし、暑さを冒してきたりけるし、るしもこそありけれとてよみける

比叡の嶺を雨過ぎしかばうるほへる杉生がもとの沙羅雙樹の花

杉の樹のしみたつ比叡のたをり路に白くさきたる沙羅雙樹の花

比叡の嶺にはじめて見たる沙羅の花木槿に似たる沙羅雙樹の花  
暑き日を萱別けなづみ比叡の嶺にこしくもしるく沙羅の花見つ  
倭には山はあれどもみほとけの沙羅の花さく  
比叡山吾れは

八月四日、法隆寺を見に行く、田のほとりに、あらたに梨をうゑたるを見てよめる

あまたたび來むと我はもふ斑鳩の苗なる梨のなりもならずも



はじめの月見の日なりけるが、ゆふまけ  
 て、姫の畑へ芋掘りに行きけるを、その家  
 の下部なるもの、駒引き出して、駈けめ  
 ぐりける間に、いたくもあれ出でて止む  
 べくもあらずなりて、思ひもかけず、主の  
 姫を蹄にかけければ、肉やぶれ、骨挫けて  
 やがていく程もなく、死にけり、人々悲  
 しむこと限りなく、しばらくありて、後そ  
 こへ幣たてきと、ありけることどもつた  
 へ云ふを聞きてよめる

世の中にしれたる人の駒たぐと過あやまちせしより  
 悔いてかへらず

垂乳根の母をゆるして芋掘りにかからむと知  
 らば行かざめや行けや

あら駒の蹄のふらくと知らませばやらめや人  
 の母を思はず  
 垂乳根の母が子芋を皿にもり見むと思ひし月  
 にやもあらぬ  
 おもしろとめづる月夜を垂乳根の母をいたみ  
 て泣くか長夜を  
 秋の夜のなが夜のくだち眞痛みに泣きけむ母  
 をもりがてにけむ  
 あやまちを再びそこにあらせじと幣はもおく  
 か駒の足の趾あの趾とに



雑詠十六首

しろたへの衣手さむき秋さめに庭の木犀香に  
きこえ來も

秋の田のわせ刈るあとの稻莖にわびしく残る  
おもだかの花

時待ちて穂にたちそめし晩稻田の花さくなべ  
にわさ田刈り干す

秋の日の日和よろこび打つ畑のくまみに咲け  
る唐藍の花

我門の茶の木に這へる野老蔓秋かたまけてい  
ろづきにけり  
さらさらに梢散りくる垣内にはうども茗荷も  
いろづきにけり  
なぐはしき嫁菜の花はみちのへの茨がなかに  
よろぼひにさく  
畝なみに作れる菊はおしなべて下葉枯れれど  
いまさかりなり  
小春日の庭に竹ゆひ稻かけて見えすなりたる  
山茶花の花



鍔刀つばたな持つ庭つくり人きりそけて乏しくさける  
 山茶花の花  
 こぼれ藁こぼれし庭の朝霜にはららに散れる  
 山茶花の花  
 つゆしもの末うら枯草がれぐさの浅茅生にまじりてさける  
 紅蓼のはな  
 冷やけく茶の木の花に晴れ渡る空のそぐひに  
 見ゆる秋山  
 馬塞垣まさせがきに繩もてくくる山吹のもみづる見れば  
 春日おもほゆ

筑波嶺は晴れわたり見ゆ丘の邊の唐人草の枯  
 れたつがうへに  
 鬼怒川を朝越えくれば桑の葉に降りおける霜  
 の露にしたたる

松かさ集 其三

なにをすることもなくてありける程鎌  
 もて門の四つ目垣のもとに草とりける  
 ことありけり。近きわたりの子供二人垣  
 のもとにいよりて物をいはずしてあり  
 けり我れこの鎌もて汝等が頭斬りてむ



と思ふはいかにといへば、大きなるが八  
 つばかりになりけるが、訝かしげなる面  
 貌にて否といふ。我れ汝らが頭きらむと  
 いふはよきかうべにして素の形につけ  
 えさせむと思ふにこそといへば、いよ  
 よ訝しみ駭けるさまにて命死なむこと  
 の恐ろしといひて垣のもととほぞきて  
 唯否とのみいひけり。小さなりけるは四  
 つばかりになりけるが、そは飯粒もてつ  
 くるにやとこれもいたくおどろけるさ  
 まにてひそやかにいひでけり。腹うち  
 抱へられて可笑しき限りなかりき。罪あ  
 る戯れなりかし。メンチといふものを玩  
 ぶとて常に飯粒もてつけ合せけるよし  
 母なるものききて笑ひつつ語りけり

利鎌もて断つといへどもとほるや蚯蚓の如  
 き洩垂るる子等  
 みみずみみず頭もなきとをもなきと露の葉蔭  
 を二わかれ行く

秀眞子ひとり居の煩しきをかこつこと  
 三とせばかりになりけるが、このごろう  
 ら若き女のほの見ゆることあるよしい  
 づこともなく聞え侍れば、彼れ此れとひ  
 ただせどもえ辨へず。その眞なりや否や  
 そは我がかかつらふところに非ず。我は  
 歌をつくりてこれを秀眞がもとおく  
 る。秀眞たるもの果して腹立つべきか、又  
 はうち笑ひてやむべきか、只これ一時の  
 戯れに過ぎざるのみ、歌にいばく



萬葉の大嘘鳥をそろをそろ秀真がやどに妻は  
 あらなくに  
 ひとりすむ典鑄司あはれみ思へれば妻覓ぎけ  
 るか我が知らぬとに  
 商人の繭買ひ袋かかぶらせ棚に置かぬに妻か  
 くしあへや  
 鶺鴒の嘴隠すにあらじ妻覓ぐと告げぬは蓋し  
 忘れたりこそ  
 唐臼の底ひにつくる松の樹の妻を待たせて外  
 にあるなゆめ

馬乗りに鞍にもたへぬ桃尻の尻すわらずば妻  
 泣くらむぞ  
 粘土を漉ねのすさびにかがる手を見せて泣か  
 すなそのはし妻を  
 朝なさな食稻とぐ手もたゆきとふはし妻子ら  
 を見せずとかいはむ

尾張熱田神宮寶物之内七種

眞熊野の熊野の山におふる樹の姥女木の洞の  
 うづの鼉太鼓  
 天飛ぶや鶺鴒の尾といひ世の人のさばの尾とも



いふ朱塗の琴  
 瀬戸の村に陶物焼くと眞埴とりはじめて焼き  
 し藤四郎が瓶  
 瀬戸物のはじめに焼きしうすいろの鈍青色の  
 古小瓶六つ  
 春の野の小野の朝臣がみこともち仕へまつり  
 し春敲門の額  
 熱田のべろべろ祭べろべろに振らがせりきと  
 いふ兆鼓  
 大倭國つたからにかすまへる納蘇利崑崙八仙

の面

尾張のや國造の宮簀媛けせりきといふ玉裳  
 御襲

大阪四天王寺什物之内四種

これ 殿戸の皇子の命の躬らつづれささせる糞掃衣

物部の連守屋を攻めきとふ鎗矢みればかなし  
 きろかも

御佛のまもりのふくろ七袋太子がもたししそ  
 の七袋



廢戸の皇子がかかせる十あまり七な、おきて條ぶ憲法み見る  
がたふとさ

明治三十六年七月我西遊を企つるや、格  
堂に約するに途必ず備前に至らむこと  
を以てす、しかも足途に大阪以西を踏む  
に及ばず、頗る遺憾となす、九月格堂遙に  
書を寄せて我が起居を問ふ、應へず、十一  
月下旬具さに怠慢の罪を謝して近況を  
報す、乃ち兒島の地圖を披きて作るとこ  
ろの短歌五首之をその末尾に附す、歌に  
いはく

おほ地つちの形の刷り卷ひらきみれば吉備の兒島  
は見えの宜しも

なぐはしき苧環をた まきぐさ草のこぼれ葉ににるかもまこ  
と吉備の兒島は

眞金吹く吉備の兒島は垂乳根の母が飼ふ兒の  
はひいでし如

燒鎌の利根のえじりと瀬戸の海と隔てもなく  
ばしき通はむに

茅渟の海や淡路の見ゆる津の國へ行きける我  
や行くべかりしを







榛の木の花

つくばねに雪積むみれば榛はりの木の梢寒けし花  
は咲けども

霜解のみちのはりの木枝ごとに花さけり見ゆ  
古ふる殻からながら

はりの木の花さく頃のあたたかに白雲うかぶ  
空のそぐへに

田雀の群れ飛ぶなべに榛の木の立てるも淋し  
花は咲けども



煤火たきすしたるなせどゆらゆらに揺りおも  
 しろき榛の木の花  
 はりの木の皮もて作る染汁に浸てきと見ゆる  
 榛の木の花  
 榛の木の花咲く頃を野らの木に鴟はつの速はや贄にんはや  
 かかり見ゆ  
 はりの木の花さきしかば土ごもり蛙は啼くも  
 あたたかき日は  
 稻莖の小莖がもとに目掘する春まださむし榛  
 の木の花

稻ぐきのもとなどに小さなる穴のある  
 を掘り返して見れば必ず鱒の潛み居る  
 を人々探り出でてはあさるなり、これは  
 冬の程よりすることなるが目掘とはい  
 ふなり

春季雑咏

淡雪の檜の林に散りくれば松雀まつすずめがこゑは寒し  
 この日は  
 筑波嶺に雪は降れども枯菊の刈らず残れるし  
 たもえに出づ



浅茅生の茅生の朝霜おきゆるみ蓬はもえぬ茅  
 生の浅茅に  
 枝ごとに三また成せる三みつまた極きまのつぼみをみれば  
 蜂の巢の如  
 春雨のふりの催もよほひに浅みどり染めいでし桑の  
 藁わら解とき放はなつ

## アイヌ

アイヌが日常の器具などを陳列せるを  
 見てよめる歌三首

アイヌ等がアツシの衣は麻の如見ゆ うべし  
 こそ樹の皮裂きて布は織るちふ  
 アイヌ等がアツシの衣冬さらば綿かも入るる  
 蒲がまのさ穂かも  
 アイヌ等は皮の衣きて冬獵に行く 鮭の皮を  
 袋にむきし沓はきながら



花崗石

花崗石といふものは譬へば石のなかの  
丈夫なり、筑波につづく山々はなべてこ  
の石もて成る

天の御影地の御影と天地の神のつくりし石の  
名なるべし

筑波嶺ゆつづく長山みじか山天の御影になり  
のよろしも

雑詠十六首

足曳の谷田ちやうのくろの揚げ土にほろほろ落つる  
檜の木の花

鋸の齒なす諸葉の真なかゆもつらぬきたてる  
たんぽぽの花

はるの田を耕し人のゆきかひに泥にまみれし  
鼠麴はこ草くさの花

うつばりの鼠の耳に似たる葉のたぐひ宜しき  
その耳菜草



あら鋤田の畔くろの杉葉におひ交り黄色に咲ける  
 つる苦菜にがなの花  
 鍋につく炭搔きもちてここと塗りたれ戯れの  
 そら豆の花  
 春雨のあらへど去らずそら豆のうらわか莢の  
 尻につくもの  
 筑波嶺のたをりの路のくさ群ぐんに白く咲きたる  
 一りんさうの花  
 藪陰のおどろがさえにはひまどひ露の葉に散  
 る忍豆しのぶの花

きその宵雨過ぎしかば棕櫚の葉に散りてたま  
 れる棕櫚せうりの樹の花  
 よひに掃きてあしたさやけき庭の面にこぼれ  
 てしるき錦木にしきぎの花  
 かはづなく水田のさきの樹群こけむらにししらしら見  
 ゆる莢蓬がますみの花  
 裕ゆたかきる鬼怒おにの川邊をゆきしかばい引き持てこ  
 しみやこぐさの花  
 いちじろく穂ほに抜く麥むぎにまつはりてありなし  
 に咲く猪殃やへむぐら々の花



暑き日の照る日のころとすなはちにかさ指し  
開く人參の花  
筑波嶺のみちの邂逅ゆきあひに山人ゆ聞きて知りたる  
やまぶきさうの花

折にふれて

菜の花は咲きのうらべになりしかば莢さかの膨はくれ  
を鶉ひなの來て喰ひ  
かぶら菜の莢喫む鶉の飛びたちに黄色のつば  
さあらはれのよき

夏季雑咏

其一

さみだれの降りもふらずも天霧あまぎりらひ月夜少な  
き夏蕎麥の花  
なつそばのはなに白める五月雨の曇り月夜に  
ふくろふの啼く  
干竿にあらひかけほす白妙のころものすその  
たち葵の花



あさ霧の庭をすすしみ落葉せる櫛がもともた  
ち掃きにけり  
にぼとりの足の浅舟さやらひにぬなはの花の  
隠りてをうく

やまべといふうをの肉も骨も一つにや  
はらかなるは五月雨のふりいづるまで  
のことなり

鬼怒川の堤におふる水蠟樹はなにさきけりや  
まべとる頃

やまべは網してとり、鯛は絲垂れてとる

忍冬の花さきひさに鬼怒川にぼら釣る人の泛  
けそめし見ゆ

即事

鬼怒川の高瀬のぼり帆ふくかせは樗の花を揺  
らがして吹く

其二

七月十一日といふより十日が程は全く  
くふ物断ちて水ばかり飲みて打過しけ  
り、幼き時よりの胃のわづらひを癒さむ  
とての企なり。素よりいえなむ日までと  
思ひ立ちたるなりければ、いつを畢りと



豫れて定むべくもあらずと

葉がくりになる南瓜のおぼろには目にみえぬ  
ごとおくが知らずも

辰巳のかぜふきて雨のふりつづきけれ  
ば鬼怒川いたくまさり濁れる水豆の畑  
にも越えたりといふをききて

よごれたるおどろがなかに鴨跖草の花かもさ  
かむ水ひきていなば

鴨跖草の花のさくらむ鬼怒川の水のあと見に  
いつかまからむ

こころ計りは慥なれども脚に力なければ  
ば頓にたたむとすれば目くるめくこと  
もありおほかたは打ち臥す藪の中にさ  
きたりけるとて百合の花をもて来てく  
れければ

さゆりばな我にみせむと野老蔓からみしまま  
に折りてもち來し

白埴の瓶によそひて活けまくはみじかく折り  
し山百合の花

いたく欲しとにはあらねど人の物くふ  
をみればうまげなるも片腹いたきおも  
ひするに、まだきにやまべの串をもてき



て呉れたるを

鬼怒川のやまべ焼串うまけれどこころなの人  
やけふ持ちて来し

鬼怒川の夏涸水のぬるき瀬にやまべとるらむ  
見にも行かめど

暑さはげしければいづこも明け放ちて  
やすらふ夏蕎麥の幹うつとて下部の庭  
にたちて振まふをうちながめつつ

柄臼を横さにたててうつ蕎麥のこぼれて飛ぶ  
を見つつおもしろ

をちこちに麥うつ音頻りにきこゆるに

となりやに麥はうてども藪こえて埃もこねば  
おもしろに聞く

連枷のとどろとどろにほこり立て麥うつ庭の  
日ぐるまの花

日のうちは暑さに疲れをおぼゆれども  
くれ近くなればいささか出でありくこ  
とあり

たまたまにたち出でてみれば花ながら胡瓜の  
しりへゆがまひて居り

真日の照り日の照るなべにさぶしらに胡瓜の  
黄葉おちにけるかも



はや土用にもいりたるに、再びすともい  
 まばやめよと切なるすすめに止むなく  
 して二十一日の夜はじめて物くふ、二日  
 ばかりして車に乗りていでありく  
 いくばくも未だへなくに葉がくり花なりし  
 菽まぶの莢になりつつ

車の上にて暑さはげしきにつくばの  
 山にはノタリといふ雲のかりたるを  
 見てちかく雨のふるならむと、少し腹に  
 力もつきたることなれば身も心もいさ  
 ましく

筑波嶺のノタリはまこと雨ふらばもろこし黍  
 の葉も裂くと降れ

其三

明治三十六年八月十日、熊野に入り那智  
 にやどる、庭にイメバ谷を隔てて名に負  
 ふ瀧のかかれるも見ゆるに、かうべをめ  
 ぐらせば熊野の浦はるばるとして限り  
 を知らず、をりしも月の冴えたる夜なり  
 ければ涼しさ肌にしみ透るやうに覺え  
 て心地いふべくもあらざりき。ことしま  
 た暑さに向ひて只管この山のすすみを  
 偲びてその夜のこころになりてよみけ  
 る歌十首

山桑の木ぬれにみゆる真熊野の海かぎろひて  
 月さしいでぬ



ぬばたまの夜の樹群のしげきうへにさゝる  
 落つる那智の白瀧

ここにしまとにかかると白瀧のすすしきよ  
 ひの那智山よしも

照る月を山かもさふる白瀧の深谷の木むれい  
 まだ見わかす

那智山は山のおもしろいもの葉に月照る庭ゆ  
 瀧見すらくも

なち山の白瀧みむとこし我にさやにあらむと  
 月は照るらし

眞むかひに月さす那智の白瀧は谷はへだてど  
 さむけくし覺ゆ

あたらしき那智の月かも人と來こばみての後に  
 もかたらはむもの

那智山の瀧のをのへに飽かず見むこよひの月  
 夜明けぬべきかも

やまとはいひ次ぐ那智の瀧山にいくそ人ぞ  
 も月にあひける



## 憶友歌

我が友瀧口玲泉は水戸の人にして早稲田出身の文士なり、軍に従ひて近衛に屬し、遼陽攻陥の際八月二十六日、大西溝の激戦に、右腕に銃創を蒙り浪子山定立病院に收容せられぬ、予頃日水戸に遊びその家人に就きて具に状況を悉すをえたり、玲泉は予が交友中尤も快活なるもの、然も肉落ち眼窩凹めるの状を想見すれば哀憐の念禁ぜず予は渠が創痕の速に癒えて後送せらるる日を待つや切なり、

乃ち之に一書を贈り、末尾に短歌十五首を附す。素渠が苦悶を慰めむと欲せしに過ぎず、語句の幹旋の如きは必ずしも意を用ゐざるなり

眞痛みにいたむ腕をいだかひて臥すかあはれ  
 諸越の野に  
 ますらをや痛手すべなみ黍の幹を敷寝の床も  
 去りがてにあらむ  
 もろこしは霜の降りきと聞きしかば痛手の惱  
 みまして偲ばゆ



籠り居る黍の小床にこほろぎの夜すがら鳴か  
 ばいかにかも聞く  
 をのこやも務めつくせり垂乳根の母ます國へ  
 はや歸るべし  
 活けるもの死にするいくさ然にあるをいきて  
 歸るに何か恨まむ  
 垂乳根の母がます國もとつ國うまし八洲はま  
 さきくて見よ  
 那珂川に網曳く人の目も離れず鮭を待つごと  
 君待つ我は

歸りくと早も來ぬかもうましらに秋の茄子は  
 いまだみのれり  
 秋はいまは馬は肥ゆとふふるさとの縣の芋も  
 肥えにたらずや  
 我がさとの秋告げやらむ女郎花下葉はかれぬ  
 花もしをれぬ  
 ありつつも見せまく欲しき蕎麥の花萎まばつ  
 ぎてをしね刈る見む  
 やすらかに胡麻の殻うつ鄙人に交りて居れば  
 君をこそおもへ



待つ久に遇ふべくあるは青菜引く冬にかあら  
 むいまかあふべき  
 かへらはば我郷訪ひこ見にまかれ足がまたけ  
 ば手は萎えぬとも(九月上旬作)

### 雲の峰

おしなべて豆は曳く野に雲の峰あなたにも立  
 てばこなたにも見ゆ  
 雲の峰ほのかに立ちて騰波の湖の蓴菜の花に  
 波もさやらず

### 雑歌

このごろの朝掃く庭に花に咲く八つ手の苞落  
 ちにけるかも  
 朝ぎらふ霞が浦のわかさぎはいまか肥ゆらむ  
 秋かたまけて  
 鮭網を引き干す利根の川岸にさける紅蓼葉は  
 紅葉せり  
 秋の田の晩稻刈るべくなりしかば狼把草の花  
 過ぎにけるかも



多摩川の紅葉を見つつ行きしかば市の瀬村は  
散りて久しも  
麥まくと畑打つ人の曳きこじてたばにつかね  
し茄子古幹

秋冬雑咏

秋の野に豆曳くあとにひきのこる莠がなかの  
こほろぎの聲  
稻幹に束ねて掛けし胡麻のから打つべくなり  
ぬ茶の木さく頃

秋雨の庭はさびしも櫛の実も落ちて泡だつそ  
のにはたづみ  
こほろぎのころろ鳴くなべ淺茅生の蕝の葉は  
もみぢしにけり  
桐の木の枝伐りしかばそのえだに折り敷かれ  
たる白菊の花  
朝なあさな來鳴く小雀は松の子をはむとにか  
あらし松葉たちぐく  
掛けなめし稻のつかねを取り去れば藁のみだ  
れに淋し茶の木は



芋の葉の霜にしをれしかたへには咲きてとも  
 しき黄菊一うね  
 獨活の葉は秋の霜ふり落ちしかば目白は來れ  
 ど枝のさびしも  
 むさし野の大根の青葉まさやかに秩父秋山み  
 えのよろしも  
 はらはらに黄葉散りしき眞北むく公孫樹の梢  
 あらはれにけり  
 秋の田に水はたまれりしかれども稻刈る跡に  
 杉菜生ひたり

此日ごろ庭も掃かねば杉の葉に散りかさなれ  
 る山茶花の花  
 鴨跖草のすがれの花に晴るる日の空のさやけ  
 く山も眞近し  
 もちの木やしげきがもとに植ゑなべていまだ  
 苗なる山茶花の花  
 葉鶏頭は種にとるべくさびたれど猶しうつく  
 し秋かたまけて  
 さびしらに枝のことごと葉は落ちし李がした  
 の石薔の花